吾輩も猫である ——日本文学史の中のネコたち（その一）

深澤昌夫

はじめに

二月二二日は「猫の日」だという。誰が決めたのか。猫の日実行委員会であるという。いつ決まったのか。一九八七年だという。では、「犬の日」はどうだろう（戌の日ではない。念のため）。こちらは一一月一日であるという。なるほど。やはり一九八七年に制定されている。いずれの場合も、関わっているのは一般社団法人ペットフード協会である。

ペットフード協会の前身は、一九六九年に設立された日本ドッグフード工業会である。その後、ペットの多様化、ことに猫を飼う家庭が増えたことでキャットフード市場が拡大。日本ドッグフード工業会は一九七五年にペットフード工業会に名称変更を行い、二〇〇九年には一般社団法人化され、名称もペットフード協会に改められた。[1]

ペットフード業界がそうであったように、かつて日本でペットといえば犬であった。二〇〇七年三月に行われたNHKの世論調査でも、日本人が好きな動物のトップは犬で、当時、犬は第二位の猫の倍近いポイントを獲得していた。[2]だが、はっきり言って、今トレンドは猫である。

そういえば、NHKで「岩合光昭の世界ネコ歩き」が単発の特番からレギュラー番組に昇格したのは二〇一三年のことである。もうその頃には十分な手応えがあったのだろう。二〇一五年ごろには猫関連のニーズの高まりから「アベノミクス」ならぬ「ネコノミクス」（猫の経済効果）などということが言われ始め、[3]それからほどなく、猫の飼育頭数はついに犬のそれを上回った。[4]犬雑誌、猫雑誌の発行部数も同様であり、[5]今や「空前の猫ブーム」といわれている。[6]

いったい、ブームというものがどのようにして発生するのか、その理由・条件・背景・プロセスには様々な社会的要因が絡み合っていて、分析は必ずしも容易ではないが、一九八〇年代初頭の「なめ猫」がそうであったように、ブームというものは往々にして数年程度で終息することが多く、たいていはある特定の時代・社会、あるいは特定の世代や集団等のなかで起きる「一過性の出来事」とみなされている。だからこその「流行」であり、「ブーム」なのである。だがしかし、それがある臨界点を突破して、広く社会に認知、受容されていくと、発生当時は新

奇な「流行」であったものも、いつしか「普通」の出来事になり、新たな「常識」、新たな「スタンダード」となる。

その意味で言うと、ブームなるものがいかにして発生するのか、という問題もさることながら、ブームが一過性のブームに終わらず、それがいかにして社会のスタンダードになっていくのか、という問題もまた、非常に興味深いものがある。

ちなみに、以前であれば、関連業界やマスコミが意図的にブームを「作り出す」ということも十分ありえたが、昨今の猫ブームはそれとは異なり、インターネットの普及と、それに伴う動画共有サイトや誰でも容易に情報発信可能な各種ＳＮＳの隆盛によって支えられている、という指摘がある。[7]

たしかに、ユーチューブの日本語版サービス開始が二〇〇七年、フェイスブック、ツイッターの日本語版が二〇〇八年、ラインは二〇一一年、インスタグラムが二〇一四年と、日本国内におけるＳＮＳの普及は目覚ましいものがある。こうしたネットワークサービスを通じて、日々膨大な量の「猫」動画、「猫」画像が電脳空間にあふれ、とりわけパーソナルなレベルでの交流と交歓、癒しと触れ合いを促していることは、まず間違いない。[8]

他方、リアルなところでは、こうした「癒しと触れ合い」をビジネスにした猫カフェがある。ウィキペディアによれば、猫カフェは台湾発祥で、日本では二〇〇四年、大阪に誕生した「猫の時間」が国内初の猫カフェであるとされている。[9]その後、猫カフェは急激に増加し、環境省の調査によれば「２００５年に３店舗だったものが、２０１５年末時点では約３００店舗が全国に展開している。」という。[10]

いや、電脳空間における「猫」動画や「猫」画像の爆発的感染拡大（ただし現状では日本国内に限られている）に比べれば、猫カフェの実店舗など物の数ではない、という見方もありうるだろう。しかし、猫カフェであれ何であれ、小規模ながら、実際に店舗を構え、人を雇い、猫を養い、多額のコストをかけながら経営を維持していく、ということは、それほどたやすいことではない。その意味で、わずか十年で店舗数が百倍という増え方は、やはり驚異的と言わざるを得ない。

ところで、猫カフェじたいは近年流行の新業態であるが、朝倉無声『見世物研究』によると、珍しい動物たちの見世物興行はすでに江戸時代初期（寛永ごろ、一七世紀前半）から行われており、その後、将軍綱吉の時代（一七世紀末～一八世紀初）に生類見世物禁止令が出されたりしたこともあったが、一八世紀末の「寛政年代から江戸の浅草と両国とに、孔雀茶屋を初め（ママ）鹿茶屋や珍物茶屋、又大阪の下寺町と名古屋の末広町とに、孔雀茶屋を開場した。（中略）其中でも江戸の孔雀茶屋は、最も好評を得たので、化成度（引用者注…一九世紀初頭）に花鳥茶屋と改称すると同時に、大いに規模を拡張して、多くの珍禽獣を見せた」とある。[11]あるいは、若尾謙二『動物園革命』もまた、「江戸時代の初期には、京都の四条河原で珍獣の見世物の興行が行われていた。（中略）江戸堺町や大坂の道頓堀などでも、動物の見世物興行は活況を呈していた。江戸時代後期になり、都市

の人口もふえると、都市に設けられた茶屋に動物が配されるようになり、定着した園地で動物を展示する施設として、大坂の孔雀茶屋、江戸の花鳥茶屋などの民営の園地が登場」したと述べており、[12] 日本では一八世紀末の寛政年間に「孔雀茶屋」「花鳥茶屋」「名鳥茶屋」など、美しい鳥や珍しい動物を客寄せに使った茶屋が存在していたことが知られている。

朝倉無声は「これらの茶屋は、動物園の先駆をなすもので」あると記すが、動物の展示（見世物）と喫茶の取り合わせは、動物園というより、まさに猫カフェの先駆形態といってよく、さすれば二一世紀初頭の猫カフェの登場、あるいは全国各地を巡回する「ふれあいねこ展」等のイベントは、たとえその発祥が海外であろうとなかろうと、いずれ日本に出現して何らおかしくない代物であった、ということもできるだろう。[13]

以上は主として「生きた猫」「生身の猫」たちの話だが、近年の猫カフェの隆盛やネット上の写真や動画の氾濫もさることながら、この間、美術界でも盛んに「猫展」が開催されるようになったことは注目に値しよう（むろんこれも日本国内の話である）。

たとえば、日頃から猫をモチーフに作品を創作している現代のアーティストたちが一堂に会し、丸善丸の内本店ギャラリーで作品を展示即売する「CATアートフェスタ」が始まったのは二〇〇五年のことであった。その翌年には、平木浮世絵美術館UKIYO-e TOKYO開館記念『〝にゃんとも猫だらけ〟えどのねこ展 CATS OF MANY VARIETIES』が開催され（二〇〇六年一〇月五日～一二月一七日）、二〇〇九年には江戸東京博物館で「江戸東京ねこづくし展」（二〇〇九年八月一三日～九月二七日）、二〇一二年には太田記念美術館の「浮世絵猫百景――国芳一門ネコづくし展」（二〇一二年六月一日～七月二六日）、二〇一五年には名古屋市博物館「いつだって猫展」（二〇一五年四月二五日～六月七日）等があり、さらにこれらの巡回展を含めれば、二〇〇〇年代初頭、すなわち平成の後半は、日本全国「猫だらけ」「ねこづくし」「猫がいっぱい」「猫まみれ」「いつだって猫」等々、とうてい数えきれないほどの「猫展」がいつもどこかで開かれている、といったような状況が出来していたのである。

こうした「猫展」でよくお目にかかるのは、江戸時代の浮世絵、それも当代きっての人気絵師だった歌川国芳（一七九八～一八六一）とその弟子たちの作品であろう。[14] 国芳が無類の猫好きであったことはあまりに有名な話だが、かといって、さすがの国芳も猫の絵ばかり描いていたわけではない。武者絵、役者絵、美人画、風俗画、戯画、春画等々、当時の絵師たちがそうだったように、国芳も求めに応じてどのようなジャンルでも描いた。中でも国芳が最も得意としていたのは、そして当時最も人気があったのは、やはり大胆な構図と躍動感に満ちた武者絵であろう。国芳は一九九六年の生誕二〇〇年、さらにまた二〇一一年の没後一五〇年と、比較的近い時期に国内外で大規模な展覧会が開催され、これまでになく認知度・注目度が高まっているところだが、中には各種「猫展」によって、はじめて国芳を知った、

あるいは浮世絵の魅力に目覚めた、という人たちも少なくないのではなかろうか。いずれにしても、国芳ファン、浮世絵ファン、あるいは美術愛好家の裾野拡大に、こうした「猫展」が大なり小なり寄与していることは間違いないものと思われる。[15]

さて、二〇一九年一〇月一九日と二〇日の両日、本学で大学祭が行われた。同年は、五月に今上天皇の即位・改元が行われ、かつ本学としても四年制大学になって開学七十周年という節目の年であった。我が日本文学科ではこの記念すべき年の大学祭に、学科の特別企画として「にちぶん猫展だヨ！　全員集合」という展示を行った。

筆者もかつて猫を飼っていた、それゆえ猫という存在に、犬よりは親近感があり、かつまたどことなく心魅かれるものを感じていた、とはいうものの、学問的なテーマとしてはあまり意識していなかった。しかし、たまたま同年、仙台市博物館で東日本初となる「いつだって猫展」（二〇一九年四月一九日～六月九日）が開催され、連日大勢の来場者を集めていたこともあって、「見る」だけではない、「読む」猫展があってもいいのではないか、あるいは、これほど多くの人に愛されている「猫」たちを案内人にすれば、文学、ことに一般にはなじみが薄く、小難しくてハードルが高いと思われがちな古典文学の世界に親しんでもらうきっかけ作りができるのではないかと考え、この企画展に取り組んだのであった。[16]

二〇一九年の「にちぶん猫展」は、古代から近世までの古典文学（歌舞伎や浄瑠璃等、古典芸能を含む）の中に登場する猫たちを時代順に並べ、これらを一般来場者や学生向けに、あるものは原文、あるものは現代語訳と、硬軟取り混ぜて、わかりやすく紹介するという方針を立てた。が、それだけではどうしても文字だけになってしまう（いや、もともと「読む」猫展なのだが…）。そこで、会場には幕末から明治にかけて盛んに制作された浮世絵やおもちゃ絵等、筆者架蔵の資料（むろん大した作ではないが、やはりコピーやデジタル画像と違って本物・現物の力は侮りがたい）を展示して、来場者に楽しんでもらうことにした。また、それとともに、学生たちや教職員に呼びかけ、「にちぶん猫展」のために自慢の猫写真を投稿してもらった。これらをプリントし、盛大に展示して、来場者が自分たちの猫の「晴れ姿」を見に来る…ついでに、いろんな猫たちに出会い…ついでに文学の中に描かれた猫たちにも触れてもらう、というスタイルを取り入れた。ありがたいことに、反応も上々で、古典文学の世界にもこんなに猫がいたのか、という新鮮な驚きをもって迎えられた。

「にちぶん猫展」そのものは大学祭の二日間で終了したが、資料調査はそう簡単には終わらなかった。そもそも特定の時代や作家に限定した作業ではなかったため、（そんなことは最初から分かっていたことではあるが…）個人で取り組むには限界があったのである。特に時代が下って近世になると、資料が激増する。しかも、近世という時代は文学・美術・演劇（芸能）が相互に連絡・影響し合い、これらが今でいうところのメディアミックス的な展開をしはじめるので、リニアな（文字・文章

だけの）文学史をイメージしていると見えなくなってしまう部分がある。とうてい一人ではカバーしきれない内容と分量である。それでも、一度手をつけた以上、中途で放り出すことはできない。何とか全体像が見えるところまで歩みを進めよう。そう考えてここまでやってきたが、一方、調査が終わるのを待っていては、ついに発表の機会は訪れない。そこで今回、内容不十分ながら、資料編だけでも少しずつ発表しておこうと考えた次第である。

それにしても、猫というのはいささか不思議な存在である。日本で飼育されているペットのツートップが犬と猫であるとして、しかし、犬と猫とでは何かが大きく異なっているように思われる。

犬は五大昔話に数えられる「桃太郎」や「花咲爺」にも登場し、日本人にとっては古くからなじみのある動物である。いや、なじみがあるどころか、多数の考古学的な成果（埋葬例）によって、犬たちは縄文時代の早い時期から私たちの祖先とともに暮らしてきたことが知られている。[17] これらは主に猟犬として活躍していたようだが、犬という動物は家畜の中でもとても賢い動物だし、何より主人に従順、忠実。危険な任務も果敢にこなし、人の役に立つことこの上ない「益獣」である。いや、猫だってネズミやモグラを捕るけれど、猟犬、番犬、盲導犬、麻薬捜査に災害救助、どんな分野もオールマイティにこなせるお犬様にはとうていかなうまい。だからこそ犬たちは、八千年も前から人の暮らしに寄り添い、特定の任務を帯びた使役犬としてはもちろんのこと、ペットという名の「家族の一員」としても長らく主役の座を維持してきたのであろう。だがしかし、犬には猫のような「不思議さ」はない。犬のことを「なんだか変なやつだなあ」「不思議なやつだなあ…」としみじみ思う人も、まずあるまい。

だがそれは犬たちのせいではない。犬たちが私たちにとって「不可思議な存在」でなかったとしても、それは犬たちの落ち度ではない（当然ですね）。そう思うのはあくまで私たちの問題だからである。ひるがえって猫のことを考えると、どうも猫たちには「世の中の役に立つ」とか「立たない」とか、実用性や有用性などといった切り口が通用しないところがある。だいたい猫を訓練して何かをさせよう、麻薬捜査猫や災害救助猫を育ててみよう、などという話は聞いたことがない（たぶん無理だろう）。仮に猫たちに「癒される～」と思う人たちが大勢いたとしても、それは私たちが勝手に癒されているだけの話で、猫はセラピー犬のように特別な訓練を受けているわけでもないし、悩み多き人々を助けたいとか、困っている人たちを見過ごすことはできない、といったような使命感も責任感もおそらく持ち合わせてはいない。そんなものとは生来無縁で生涯無縁の、しかし人間にとって最も身近な動物の一つ、それが猫という生き物である。

そこで私たちは考える。いったい猫たちはなぜこんなにも人々を魅了するのだろう。いや、私たちはなぜこんなにも猫た

ちに魅了されるのだろう。それは、猫たちが「かわいい！」からである。猫好きの人たちに聞けば、みなそう答えるだろう。そして、「かわいいものに理由なんてありません！　説明不要！証明おわり！」そう言われてしまうかもしれない。

むろん、そういう気持ちもわからなくはないが、私は、猫だってただたんに「かわいい」だけではないのではないか、とも思うのである。いやそもそも、「ただたんに」かわいい、などというものはこの世に存在しない、という考え方もあるだろう。すでにいくつかの論考があるように、「かわいい」は意外に奥が深いのである。[18]

筆者としては当面（というか今後も）、キティちゃんやゴスロリ、あるいはなんちゃって制服等々、現代日本が世界中に広めた「かわいい！」ものたち、その価値・観念・文化的意義について真正面から論じる予定はないが、猫が「かわいい！」かどうかは、猫自身の問題という以上に、そう思ってしまう私たち自身の問題であり、現代の日本がまさに空前の猫ブームだとするならば、それはすぐれて現代社会のありように直結した、まさに今日的な問題であろうと考えている。[19]

いや、話が大きくなりすぎたようだ。ここでちょいとばかり猫という存在の魅力、あるいは不思議さについて個人的な話をさせていただきたい。

私がまだ幼いころの話である。我が家で最初に飼った動物は犬だった。犬種はスピッツである。スピッツも高度成長期の一時期、たいへんなブームだった。私たちはその犬を「タロウ」と呼んでいた。オスだった。しかし、当時の私は小さすぎて、犬の世話をした覚えも、いっしょに遊んだ記憶もあまりない。その犬がその後どうなったのかもよく覚えていない。これに対して猫のほうは、私がもう少し大きくなってから我が家にやってきた。もとはどこかの飼猫だったようだが、しょっちゅううちに遊びに来るので、家族の誰かれが庭先でエサを与えているうちに、いつの間にか家の中にあがりこみ、数度の攻防戦を経て、ついに我が家に居ついてしまった、そういう猫だった。私たちはその猫のことも「タロウ」と呼ぶようになった。二代目「タロウ」である。正直、犬でも猫でも、オスでもメスでも、私たちはあまり気にしなかった。もともとうちの猫ではないので、さしたる思い入れもなく、とりあえず付けた呼び名だったからである。これは江戸時代、下働きをする下女たちを当人の本名に関係なく「おさん」と呼んだ、という風習や感覚に近いかもしれない。それはともかく、うちの猫の場合、家族の誰かが「猫を飼おう」と思って飼った（あるいは買った）のではなくて、むしろ猫のほうが私たちを選び、私たちのほうはそれを、最初は戸惑いつつ、後はもうしょうがないよなぁ…とあきらめ、受け入れるかたちで付き合いが始まったのだった。[20]

だから我が家では彼女に対して「ペット」という意識はあまりなかった。人と犬のような、いわゆる「御恩と奉公」のごとき主従関係でもない。あるいは、犬であれば子どもたちのよき遊び相手として仲間・友人・相棒といった意味の「バディ」となる場合もあろうが、そういう関係でもない。昨今のペット事

情を考えると、飼育している動物たちを自分たちの「家族」と考えている人が多いかと思われるが、私個人はそれともちょっと違っていたような気がしている。あえて言えば「同居人」というべきか。今はやりの言葉を使えば「ルームシェア」である。むろん、家族といっしょに暮らすことを「ルームシェア」とは言わない。それは、赤の他人と何らかの合意を形成し、一定期間一つ屋根の下で暮らすことであり、これが恋人同士であれば「同棲」だが、「ルームシェア」はそれとも違う。何らかの理由で同居はしているが、メンバーには一定の距離感がある。

そういえば、我が家では猫にトイレトレーニングを施した覚えがない。彼女は我が家に来た時はすでに「大人」で、家の中で粗相をしたこともない。したくなれば外に出たいと訴え、戸を開けてやると外に出て、人知れず済ませてくるらしかった。そこで我が家では、猫がいつでも好きな時に出入りできるように、わざわざ勝手口を加工して猫用の出入口を作った。内側にもう一枚引き戸を設置して（これもわざわざ）、風除室を作ってである。

猫というものは、一般にそういうものかもしれないが、それが飼主であっても、人とズルズルベッタリの関係は望んでいないようだったし、私たちも猫の後を追いかけたり、わざわざ猫じゃらしで遊ぶ／遊ばせるようなことはなかった。「おなかすいた」「外に出たい」「うちに入れて」。アクションはいつも猫のほうから行われ、私たちはその要求に耳を貸すだけでよかった。ドアはさすがに難しいが、襖や引戸であれば自分で開けてしまうし（後ろ脚で立ちながら）、寝る時は誰かの布団の上に乗ってきたり、寒ければ布団の中にもぐりこんでくる。だが、それもあくまで向こうの自由意志であり、私たちには選択権もなければ、無理強いもできない（したところで逃げていく）。日々一緒に暮らし、一定の場と時間を共有しつつ、しかし猫には猫の世界があり、私たちには私たちの暮らしがある。お互い、付かず離れずで、それでいながら、たしかな絆と信頼関係があった。むろん猫に確かめたわけではないが…。それでも、向こうは私たちのいうことは全部わかっているようだった。もうとうの昔に亡くなってしまったが、美人で、知的で、身のこなしが何とも優雅で、「聡明」という言葉がふさわしい、そんな大人っぽい猫だった。

いや、猫は猫である。家の柱で爪とぎはするし、カーテンは破くし、ほめてほしくて（決して食べるわけではない）ネズミやモグラをつかまえてくることもあった。だが、これは大方に支持されるのではないかと思うけれど、猫は私たちがいっしょに暮らす生き物としては、数少ない「コミュニケーションが成立する」動物であろうと思われる。そしてまた、猫たちには、犬にはない、ある種の「人間らしさ」（あるいはそのように想像させる「何か」）がある。猫というのは、たまたま「猫」の姿をした「人」なのではないか、と感じる時さえある。猫よ、いったいお前さんは何者なのか？　つくづく不思議な存在ではある。

閑話休題。先に述べたように、本稿の元になっているのは二〇一九年の「にちぶん猫展」用に作成したものであり、講義・講演等の資料として活用することも考慮して、学生向け、あるいは一般向けの内容になっている。作品は比較的入手しやすいもの、また文学史的に重要と思われるものを中心に取り上げた。その配列も基本的に時代順・成立順になっている。作品本文は、小学館の「新編日本古典文学全集」所収作品であれば、基本的にこれを用いることとし、いちいちの出典は省略した。したがって、出典の記載のある作品は「新編日本古典文学全集」未収録作品ということになる。

掲出本文は、先述のごとく学生向け・一般向けであることを意識して、原文そのままの場合もあれば、私に現代語訳したもの、あるいは梗概や大意を示すに留めたものなど、さまざまである。いずれの場合も、通読の便を考慮して、章段に見出しをつけたり、語句・文脈の理解に役立つよう括弧書きで説明を補ったり、読み仮名を振ったり、原文平仮名表記に適宜漢字をあてるなど、私に手を加えている。

本稿のタイトルは夏目漱石の『吾輩は猫である』にあやかって、「吾輩も猫である」とした。通常の学術論文らしからぬ題名だが、まずは、より多くの人々に、こんなところに猫がいる、あんなところにも猫がいる、と気づいてもらいたい。そうして、猫を通して古典文学に親しんでもらいたい。そう考えてのネーミングである。[21]

以下、本稿では岡田章雄『犬と猫』（毎日新聞社、一九八〇・三）、田中貴子『猫の古典文学誌――鈴の音が聞こえる』（講談社／講談社学術文庫、二〇一四・一〇。原著は二〇〇一年、淡交社刊）、鈴木健一編『鳥獣虫魚の文学史――日本人の自然観』全四巻（三弥井書店、二〇一一・四～二〇一二・九）、谷真介『猫の伝説116話』（臭社、二〇一三・三）、藤原重雄『史料としての猫絵』（山川出版社／日本史リブレット、二〇一四・五）、桐野作人『猫の日本史』（洋泉社／歴史新書、二〇一七・一）、今井秀和『世にもふしぎな化け猫騒動』（KADOKAWA／角川ソフィア文庫、二〇二〇・七）等々、種々さまざまな先行研究に導かれつつ、一般的な文学史の時代区分に従って、古代・中世・近世に分け、まず「古代文学編」と「中世文学編」を掲載する。また、ごく一部だが、古辞書において猫がどのように記述されているかについても確認しておこう。なお、この後に続く「近世文学編」は、それこそ筆者の本丸とすべき時代だが、現時点ですでに今回掲出資料の五倍以上の分量があり、まだまだ取り上げるべき作品も多い。あるいはまた、これは古典文学の範疇を超えてしまうが、前近代の遺産を多分に受け継いだ大正・昭和期の映画史にも看過できない作品が多数ある。もとより際限のない作業ではある。ここに掲出したものも、膨大な文学史的遺産のごく一部にすぎないことをお断りしておく。

ではこれから、日本文学史（古典）のそこかしこに身をひそめている、可愛らしくも妖しい猫たちを追跡・探索し、一時ともに戯れてみることにしよう。

（1）一般社団法人ペットフード協会公式ウエブサイト「沿革」参照。https://petfood.or.jp/outline/history/index.html

（2）ＮＨＫ放送文化研究所・世論調査部編『日本人の好きなもの―データで読む嗜好と価値観』（日本放送出版協会／ＮＨＫ出版生活人新書、二〇〇八・一）によれば、好きな動物の第一位は「犬」六三・三％、第二位が「猫」三三・九％、第三位が「イルカ」二八・二％であった（選択肢五二項目からの複数回答）。この時の調査では、全国の一六歳以上の国民三六〇〇人を対象に、計五四項目にわたって「あなたの好きなもの」を尋ねた（回答が得られたのは二三九四人）。その「調査結果から浮かびあがった日本人の好みを端的に表現すると」、「犬連れて、桜を愛でて、すしを食う」であるという。しかもこれらは「多くの人が答えたというだけでなく、男女や年齢層による差が少なく、幅広く好まれていました。」とある。おそらく「桜を愛でて、すしを食う」については今もあまり変りないのではないかと思われるが、それから十年余りで「犬連れて」のところだけが変わってしまったようである。

（3）宮本勝弘「ネコノミクスの経済効果」によれば、その経済効果は二〇一五年一年間で約二兆三一六二億円であると試算されている（関西大学プレスリリース、二〇一六・二・五）。

（4）一般社団法人ペットフード協会が毎年行っている「全国犬猫飼育実態調査」によれば、犬・猫とも飼育頭数のピークは二〇〇八年度で、当時犬が一三一〇万一千頭、猫が一〇八九万頭であった（いずれも推計値）。https://petfood.or.jp/data/chart2008/04.html

その後、猫は微減、ないしほぼ横ばいを維持したが、犬は急速に減少し、二〇一七年度には猫の飼育頭数が初めて犬の飼育頭数を上まわった（犬…八九二万頭、猫…九五二万六千頭）。https://petfood.or.jp/data/chart2017/3.pdf

そして二〇二〇年度の調査では、犬…八四八万九千頭に対して、猫…九六四万四千頭という結果が出ている。https://petfood.or.jp/data/chart2020/3.pdf

（5）ネットを中心に活躍しているジャーナブロガー、不破雷蔵「犬と猫、どちらの専門誌がよく売れているのか…犬猫系雑誌の部数動向をさぐる（二〇二〇年四～六月）」は、印刷証明付き部数が確認できる唯一のペット専門誌としてベネッセの「いぬのきもち」と「ねこのきもち」を取り上げ、その発行部数動向を検証している。同氏によれば、「いぬのきもち」は二〇〇九年に約一六万部でピークに達した後、急速に部数を減らし、二〇一六年には「ねこのきもち」に追い抜かれ、二〇二〇年現在七万部弱と減少傾向が続いているが、「ねこのきもち」は二〇一〇年に約一一万部でピークを迎えた後、同じように減少傾向をたどるものの、その傾きはゆるやかで、二〇二〇年現在八万部弱にとどまっている。

https://news.yahoo.co.jp/byline/fuwaraizo/20200827-00195087/

（6）赤川学「猫ブームの理由――飼主との間にある独特な関係性とは」FEATUERS、二〇一八・一一・六（初出『東京大学広報誌　淡青』三七号「特集―猫と東大」、二〇一八・九）。https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/features/z1304_00007.html

後に東京大学広報室編『猫と東大。――猫を愛し、猫に学ぶ』（ミネルヴァ書房、二〇二〇・一一）に収録。

なお、真辺将之『猫が歩いた近現代――化け猫が家族になるまで』（吉川弘文館、二〇二一・五）は歴史学の立場から明治以降現代にいたる「近代・現代における猫の歴史」を記述したものであり、近年のいわゆる「空前の猫ブーム」についても冷静で客観的な視線を投げかけている。その点、「巷に溢れる俗流『猫の歴史』記述」（同書）とは一線を画すものといえよう。

（7）北洋祐「どこを向いても猫だらけ――日本の猫ブームを考える」二〇一七・八・八、ニッポンドットコム。https://www.nippon.com/ja/currents/d00344/

阪根美果「広がる「猫ブーム」に潜む危うさとは？」『読売新聞』二〇一八・一・七。https://www.yomiuri.co.jp/fukayomi/20171228-OYT8T50000/

（8）問題は、デジタル技術を活用した高度情報化社会では、いったん共感・同調・模倣の拡大再生産が始まると、それが社会的に好ましいことであれ、好ましくないことであれ、しばしば抑制が効かなくなる場合がある、という点にあるが、それは本稿のテーマではない。

（9）ウィキペディア「猫カフェ」の項参照。

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8C%AB%E3%82%AB%E3%83%95%E3%82%A7

（10）環境省中央環境審議会動物愛護部会第42回（二〇一六・三・一開催）会議資料2-3「猫カフェ業界の現況と猫カフェ協会による取組について」

https://www.env.go.jp/council/14animal/y14042/mat04.pdf

（11）朝倉無声『見世物研究』（筑摩書房／ちくま学芸文庫、二〇〇二・二。原著は一九二八年四月、春陽堂から刊行）

（12）若尾謙二『動物園革命』（岩波書店、二〇一〇・一二）

（13）ただし、江戸期の花鳥茶屋があくまで「珍しさ」を売り物にした「見世物」だったのに対して、現代の猫カフェおよび猫ブームは「珍しさ」や「新しさ」ではなく「かわいい！」に牽引、駆動されている点が大きく異なる。

（14）たとえば、平木浮世絵財団の「にゃんとも猫だらけ展」の図録（二〇一二・一）を見ると、国芳の掲載作品は六三点で最多。次点は国貞（三代豊国）の二〇点である。あるいは、名古屋市博物館の「いつだって猫展」の図録（二〇一五・四）も、最多はやはり国芳で五〇点、次点は国貞（三代豊国）一四点である。その他、「アートになった猫たち展」の公式書籍である『アートになった猫たち――今も昔もねこが好き』（青月社、二〇一七・四）は、全体として多様な作家がバランスよく収録されているように思われるが、それでも最多は国芳で二〇点、次点は楊洲周延（ちかのぶ）の一二点、さらに竹久夢二（八点）、三代豊国（七点）、芳藤と芳年（ともに六点）と続く。

（15）これはあくまで一例に過ぎないが、山梨県立博物館の「すごすぎる！ねこ展――ヒトとネコと出会いと共存の歴史」（二〇一九・七・一三～九・二）は美術資料のみならず古文書や考古資料等を交えた、博物館ならではの総合的な企画展で、来場者が三万人を突破する人気ぶりだったという。

http://www.museum.pref.yamanashi.jp/3nd_tenjiannai_19tokubetsu002_3man.html

（16）「にちぶん猫展だヨ！」にはもともとそういう狙いがあったので、

企画展の名称に「日文（だから）ね、（やっぱり）古典だよ」というメッセージを忍ばせてあるが、むろん来場者が気づいたかどうかは定かではない。

(17) 山田康弘「縄文時代のイヌ――その役割を中心に――」（比較民俗研究会『比較民俗研究』9、一九九四・三）

(18) 四方田犬彦は、『「かわいい」論』（筑摩書房／ちくま新書、二〇〇六・一）の中で、「きもかわ（きもかわいい）」の分析から次のような見解を導いている。

　気味が悪い、醜いということと、「かわいい」こととは、けっして対立するイメージではなく、むしろ重なりあい、互いに牽引し依存しあって成立しているモノなのである。これは逆にいえば、あるものが「かわいい」と呼ばれるときには、そのどこかにグロテスクが隠し味としてこっそりと用いられていることを意味している。（中略）わたしは本章の冒頭で、「かわいい」が「美しい」の隣人であると記したが、この言葉は厳密に訂正をしなければならないだろう。すなわちグロテスクであること、畸形であることこそが「かわいい」の隣人なのだ。両者を隔てているものは実に薄い一枚の膜でしかない。だがその観念的な膜に保護されているがゆえに、「かわいい」は親し気で心地よいものとして肯定的に受け留められ、その膜の外部に置かれているがゆえに、「醜い」「きもい」は脅威的で不安と不快感をもたらすものとして忌避される運命となる。何かの偶然でこの膜が破損したとき、われわれの日常生活において思いもよらぬ事件が生じることは、子殺しやペット遺棄の例からも明らかである。そのときわれわれは「かわいい」と信じきっていた赤ん坊や動物が、実は自分が無邪気に抱いていた人間という観念を危うくさせる他者であるという事態に直面して、パニック状態に陥ってしまうのだ。そして「きもかわ」とは、この二つの世界の境界領域において生起する事件であり、それを通してわれわれが「かわいい」なるものの本質を垣間見ることもできる稀有の状況であると、ひとまず結論することができるだろう。

（同書第四章「美とグロテスクの狭間に」）

　四方田はまた、「かわいい」は「つねに儚げなものであり、ヴァルネラビリティ（引用者注…弱く傷つきやすいこと、あるいはそのような人、もの、状態）に満ちた存在である。それはまったくの偶然から、たやすくグロテスクで脅威的な怪物へと変身してしまう。」とも述べている（同書「エピローグ『かわいい』の薄明」）。

　あるいは、櫻井孝昌『世界カワイイ革命――なぜ彼女たちは「日本人になりたい」と叫ぶのか』（ＰＨＰ研究所／ＰＨＰ新書、二〇〇九・一一）もまた、「カワイイ」には、たとえばファッションにおけるゴシックとロリータ、あるいはパンクと制服など、本来、対極にあるようなものをまとめる力があり、「なんだかわからないもの」やゾンビですら「カワイイ」になる。「カワイイは、もはやいろいろな意味をもっている。本来の言葉の意味を大きく超えた、日本がつくりだした新たな概念と理解すべきなのだ。」と述べている（同書第5章「不況脱出の切り札は『カワイイ』にある」）。

(19) 阪神淡路大震災や東日本大震災などの大規模な自然災害に直面し、またバブル崩壊後の長期的な不況とそれにともなう社会構造の劇的

な変化・変動・変革を経験してきた二一世紀初頭の日本は、ありとあらゆるものに「カワイイ！」のラベルを貼り付け、「カワイイ！」ものに取り巻かれ、心身ともに癒されたがっているように見える。が、さしあたり本稿はそうした問題には立ち入らない。

(20) ちなみに、猫を屋外に出さなくなった平成以降は、あまりこういう事例はなさそうだが、昭和期はさほど珍しくなかった。この点について、獣医外科学が専門の西村亮平は、「猫はペットとして今や最も数が多いのに、犬などとは異なり〝家畜〟の定義に当てはまらない要素をいくつも持つ、ある意味奇妙な存在でした。家畜はその個体や繁殖が完全に人の管理下にあるものとされますが、これまでの猫たちは勝手気ままに外を出歩くし、繁殖もほとんどの猫が人間の管理外にあるという状況でした。」これに対して、近年の「完全室内飼いへの移行は猫の歴史上初の出来事でしょう。」と述べている（前掲『猫と東大。』所収「猫好き4教授座談会」）。

このことはまた、より大きな問題に結びついている。近現代社会経済史が専門の小野塚知二は、「世界は、野良猫のいる社会といない社会とに二分できます。現在、野良猫のいない地域は、極地や砂漠など猫が生存できない自然環境を除くなら、野良猫を人為的に消滅させた社会です。」と述べる。歴史的に見れば、猫たちは「人の環境にいながら、人からは相対的に自立して自由に歩き回り、餌を獲得するという野良猫の状態」が一般的で、誰にも飼育されていない完全な野良猫や、誰かの飼猫でありながら自由に外を出歩き、「他の猫と交際し、餌（小動物）を捕獲する、いわゆる半野良も野良猫の範疇に含まれる」。とするならば、「家畜化されてからのほとんどの期間を、野良猫として存在してき」た猫たちを、イギリスやドイツのように人為的に消滅させ、人の保護管理下におき、非野良猫化してしまうことがいったいどのような意味を持つのか、考える必要があるのではないかと説く。この点まさしく氏が指摘するように、「野良猫は人と社会を映し出す鏡なのです」（前掲『猫と東大。』所収「野良猫のいる社会といない社会――生殖の統御は完全に正当化しうるか？」）。

(21) 校正の最終段階になって、『吾輩も猫である』という同名書籍のあることを知った。二〇一六年、雑誌『小説新潮』が漱石没後百年記念として企画した、赤川次郎・新井素子ら、八名の猫好き作家によるアンソロジーである。もっぱら古典文学ばかり追いかけていて、近刊にこうした書籍のあることを知らなかったのはうかつだったが、同書や本稿のような、いわば『猫である』の知名度に便乗した「あやかりタイトル」「あやかり作品」は他にも多数確認されている。特に『吾輩は猫である』というタイトルは、構文的にはシンプル、かつ現実的にはナンセンスな文なので、これを真似て、あるいは応用していろいろ作ってみたくなるのであろう。『猫である』の「擬態本（パロディ）」を徹底的に調査した榊原鳴海堂「漱石擬態本詳細書誌」（小田切靖明・榊原鳴海堂『夏目漱石の研究と書誌』ナダ出版センター、二〇〇二・七）によれば、本家『猫である』完結後、最初に出たのも『吾輩も猫である』という作品であった。これはこれで、享受史の一コマとして興味深いテーマかと思われるが、いまはこれ以上深追いしないでおく。

吾輩も猫である
――日本文学史の中のネコたち【古代文学編】

仏教説話集

景戒『日本国現報善悪霊異記』　平安時代初期（九世紀末）成立

○生まれ変わるなら…、やっぱりネコがいいかも

慶雲二年（七〇五）九月十五日、膳臣広国という者が死んだ。が、三日後に蘇生。冥界で妻と、三年前に死んだ父に会ってきたという。妻も父もそれぞれ生前の報いにより、からだに鉄の釘を打ち込まれたり、鉄の縄で縛られたり、鉄の鞭で朝に三百、昼に三百、夜に三百回打たれたりして、たいへん苦しんでいた。（この後の妻のくだりは省略）

さて、父が言うには、死後、飢えに苦しんで三度も息子（広国）の家を訪ねた。最初は七月七日、大蛇の姿で行った。すると杖で引っかけられ、うち捨てられてしまった。二度目は五月五日、今度は赤い狗になって行ったら、他のイヌをけしかけられ、とにかく逃げ帰った。三度目は正月元旦に狸（十世紀の写本、興福寺本『霊異記』は「狸」と書いて「祢己」と訓注）になって訪ねていった。そうしたら、なんと今度はいろいろ食べさせてもらえたので、ようやく三年来の飢えから解放された。だがしかし、自分は生前に犯した罪のため、残念ながらまた赤いイヌになって食べ物をあさることになるのだろう…。息子よ、どうか私のために仏像を造り、経文を写し、供養しておくれ。亡父は広国にそう語ったという。

（上巻「非理に他の物を奪ひ悪行を為し報を受けて奇しき事を示しし縁」第三〇）

＊『日本霊異記』は南都（奈良）薬師寺の僧景戒の手になる日本最古の仏教説話集（原漢文）。同じ話が『今昔物語集』巻第二〇「本朝付仏法」第一六「豊前国膳広国行冥途帰来語」に収録されている。

日記

宇多天皇『宇多天皇御記（寛平御記）』　平安時代初期（九世紀末）成立

○うちのネコは特別なんです

六日。朕閑時述猫消息曰。驪猫一隻。太宰少貳源精秩満来朝所献於先帝。愛其毛色之不類。余猫猫皆浅黒色也。此独深黒如墨。為其形容悪似韓盧。長尺有五寸高六寸許。其屈也。小如秬粒。其伸也。長如張弓。眼精晶熒如針芒之乱眩。耳鋒直竪如匙上之不揺。其伏臥時。団円不見足尾。宛如堀中之玄璧。其行歩

時。寂寞不聞音声。恰如雲上黒龍。性好道行暗合五禽。常低頭尾著地。而曲聳背脊高二尺許。毛色悦沢蓋由是乎。亦能捕夜鼠捷於他猫。先帝愛翫数日之後賜之于朕。朕撫養五年于今。毎旦給之以乳粥。豈啻取材能翹捷。誠因先帝所賜。雖微物殊有情於懐育耳。仍曰。汝含陰陽之気備支竅之形。心有必寧知我乎。猫乃歎息挙首仰睨吾顔。似咽心盈臆口不能言。

（寛平元年〈八八九〉二月六日の条）

【大意】

今日は時間があるので猫のことを書いておく。朕は一匹の黒猫を飼っている。この猫はもともと、以前太宰少貳（大宰府の次官）であった源精が任期満了で大宰府から帰朝・帰洛の折、先帝光孝天皇に献上したものである。その毛並み、毛色は無類で、他の猫どもの毛色がたいてい浅黒いのに対して、この猫だけは墨のように真黒である。まるで中国春秋戦国時代にいたという「韓盧」という名の黒毛の猟犬（しかも俊足で賢い）のようだ。大きさは一尺五寸（約45センチ）、背の高さは六寸ばかり（20センチ程度）。体を丸めると小さくなって、まるで黒黍のよう。大きく伸びをすると、まるで弦を張った弓のようにしなる。その眼は針がキラキラきらめくように光り、耳は匙を立てたようにぴしっと立っている。伏している時はくるんと丸くなって足も尾も隠れている。まるで岩屋の中に鎮座する黒い宝石のようだ。また、歩く時は静かで足音も聞こえない。まるで黒い龍が雲の上を行くかのごとくである。呼吸は深く、その動きは五禽（虎・鹿・熊・猿・鳥）にも通じる。いつもは頭を低くし、尾を地につけて歩くが、背を大きくそびやかすと高さ二尺あまりにもなる。毛色は艶やかで素晴らしく、またよく鼠を捕る。他の猫より動きが素早いのだ。この猫はもともと先帝に献上されたものだが、数日愛玩ののち、私に下されたものである。以来五年、毎日乳粥を与えている。でもそれは、この猫が他のどんな猫にもまして優れているから…ではなくて、先帝御下賜の猫だから。だから、それがどんなに小さな生き物でも大切に育てているだけである。そんなわけで、私は猫に尋ねてみた。「お前は、陽の気も、陰の気も、からだも手足も、何もかも備わっているのだから、きっと私の心だってわかっているのだろうね。」だが、猫は何も答えず、ため息をついて首をあげ、私の顔を見上げるのだった。

＊『宇多天皇御記』本文は〈増補史料大成〉『歴代宸記』（臨川書店、一九六五・八）に拠る。

日記・随筆

清少納言『枕草子』　　**平安時代中期（一一世紀初頭）成立**

---

①ねぇねぇ、かわいくない？

猫は、上のかぎり（背中だけ）黒くて、腹いと白き。

（第五〇段「猫は」）

②ねぇねぇ、優雅じゃない？

なまめかしきもの、ほそやかに清げなる公達の直衣姿。（中略）薄様の草子。柳の萌え出でたるに、青き薄様に書きたる文つけたる。（中略）簾の外、高欄にいとをかしげなる猫の、赤き首綱に白き札つきて、はかりの緒、組の長きなどつけて、ひき歩くも、をかしうなまめいたり。

（第八五段「なまめかしきもの」）

③ねぇねぇ、…う～ん、これ説明するの、ちょっと難しいかも

むつかしげなるもの（面倒なもの、うっとうしいもの、すっきりしないもの）、縫ひ物（刺繍）の裏。鼠の子の毛もまだ生ひぬを、巣の中よりまろばし出でたる。裏まだつけぬ皮ぎぬ（舶来の毛皮の着物）の縫ひ目。猫の耳の中。ことに清げならぬところの暗き。

（第一四九段「むつかしげなるもの」）

■ちょっと寄り道 ―『枕草子』のなかの犬たち

①私たち…、何か嫌われるようなこと、したんでしょうか？

すさまじきもの、昼ほゆる犬。春の網代。三、四月の紅梅の衣。（以下略）

（第二三段「すさまじきもの」）

にくきもの、いそぐ事あるをりに来て、長言するまらうど。あなづりやすき人ならば、「後に」とてもやりつべけれど、心はづかしき人、いとにくくむつかし。硯に髪の入りて磨られたる。また、墨の中に、石のきしきしとときしみ鳴りたる。（中略）蚤もいとにくし。衣の下にをどりありきて、もたぐるやうにする。犬のもろ声に、長々と鳴きあげたる、まがまがしくさへにくし。開けて出で入る所、たてぬ人、いとにくし。

（第二六段「にくきもの」）

②ネコ可愛がりの一条朝で起きた、衝撃の動物虐待事件!?

一条天皇は飼っている猫に「命婦のおとど」という名を付け、（動物なのに）五位の位まで与え、乳母（世話係）まで添えてたいそう可愛がっていた。内裏にはまた「翁まろ」という犬もいて、皇后定子の食事時には傍近く伺候し、桃の節供には頭に桃の花をさしてもらったり、かれこれ、犬も猫も人々から可愛がられていた。

ある日の朝、命婦のおとどが縁先に出て、じっとうずくまっ

ていた。それを見た世話係の馬の命婦（「馬」とあるがこれは人）が「まあ、命婦のおとどったら、お行儀が悪いこと。翁まろ、さあ、命婦のおとどに噛みついて、お仕置きしておやりなさい」と戯れた。ところが犬はお馬鹿さんだったので、命じられるままに猫に飛びかかっていった。びっくりした猫は御簾のうちに逃げ込んだ。帝はちょうど朝食時で、この様子を御覧になっていた。帝は猫を懐に入れ、蔵人たちを呼び「翁まろを懲らしめてやれ。そして犬島（と呼ばれるような収容施設でもあったか？）に連れて行け。今すぐにだ！」と命じた。

数日後、犬島に追いやられたはずの翁まろが御所に戻ってきた。蔵人たちはまた無慈悲にも犬をつかまえて、二人がかりで打擲（ちょうちゃく）する。悲鳴を上げる翁まろ。清少納言は騒動を聞きつけ、乱暴を止めさせようと人を遣わすが、男たちは「もう死んだので捨てました」という。その日の夕方、全身ひどく腫れ上がった犬がぶるぶる震えながら歩き回る。「翁まろ？」と尋ねても反応しない。人々も、翁まろか、そうでないか、なかなか判断がつかない。いつもの翁まろなら、呼べば飛んでくるのに…。夜になって何か食べさせようと思ったけれど、犬は何も食べなかった。

翌朝、例の犬はじっとうずくまっている。「翁まろはかわいそうなことをした。今ごろは何に生まれ変わっていることやら…」。ふとそんなことを口にしたら、例の犬がぶるぶる震えて涙をこぼすではないか。「やっぱり、翁まろなのね？」そう尋ねると、ひれ伏してひどく鳴く。……翁まろはその後、罪もゆるされて、また元通りの暮らしに戻ることができたのだった。

（第七段「うへに候ふ御猫は」）

＊「命婦（ミャウ）のおとど」という命名は、猫の鳴き声、あるいは「猫」の字音（苗miao）に由来するのではないかと思われる。

＊ちなみに、寺院において、仏像を安置しておく「内陣」と、人々（僧侶や参詣人）のいる「外陣」との境に背の低い柵が置いてあった。これを「犬防ぎ」という。すなわち、平安時代における犬の位置付けはかようなものであった、ということだろう。

日記

藤原実資『小右記』

平安時代中期（一〇世紀末～一一世紀初頭）成立

○いくらネコ好きでも、ちょっとやりすぎ？

九月十九日戊戌（ぼじゅつ）　日者内裏御猫産子、女院、左大臣（道長）、右大臣（頼光）、有産養事、有衝重垸飯、納笥□□云々、猫乳母馬命婦、時人咲之云々、奇怪之事、天下以目、若是可有徴歟、未聞禽獣用人礼、嗟乎、

（長保元年〈九九九〉九月一九日の条）

【大意】

長保元年（九九九）九月十九日、戊戌の日。最近、内裏の御猫が子を産んだ。女院（一条天皇の母）藤原詮子、左大臣藤原道長、右大臣藤原顕光が産養い（祝賀の儀式）を行い、衝重（御膳）や垸飯（饗応）、箱に収めた□□（欠字）まで供されたとか。猫の乳母に馬の命婦（という名の女房）が指名されたという（笑）。とうてい理解を超えている。もしかすると何かよからぬ徴があるのではないか。禽獣の扱いに人の礼を用いるなどまったく前代未聞である。ああ、なんと嘆かわしいことではあるまいか…

＊藤原実資（天徳元年〈九五七〉～永承元年〈一〇四六〉）の日記『小右記』（原漢文）は、天元五年（九八二）から長元五年（一〇三二）までの記事が現存している。同書によれば、『枕草子』にも出てくる一条天皇の飼猫「命婦のおとど」は長保元年九月生れ。当時、一条天皇とその周辺の度を越した猫可愛がりの様子は人々の笑いものになっていたらしい…。

＊本文は〈増補史料大成〉別巻『小右記』一（臨川書店、一九六五・九）に拠る。合わせて倉本一宏編『現代語訳・小右記』3（吉川弘文館、二〇一六・一〇）も参考にした。

作り物語

紫式部『源氏物語』

平安時代中期（一一世紀初頭）成立

①運命の出会い…、きっかけはネコでした

夕霧や柏木が六条院の庭で蹴鞠をしていた時のこと、小さな唐猫が大きな猫に追いかけられて、御簾から飛び出してくる。と、その首綱が引っ掛かり、御簾がめくれ上がってしまう。そして二人は、出会ってしまう。

唐猫のいと小さくをかしげなるを、すこし大きなる猫追ひつづきて、にはかに御簾のつまより走り出づるに、人々（御簾の内の女房たち）おびえ騒ぎてそよそよと身じろきさまよふけはひども、衣の音なひ、耳かしがましき心地す。猫は、まだよく人にもなつかぬにや、綱いと長くつきたりけるを、物にひきかけまつはれにけるを、逃げむとひこじろふ（引っ張る）ほどに、御簾のそばいとあらはに引き上げられたるを（びっくりして）とみに引きなほす人もなし。この柱のもとにありつる人々も心あわたたしげにて、もの怖ぢしたるけはひどもなり。几帳の際すこし入りたるほどに、袿姿にて立ちたまへる人あり。（中略）猫のいたくなけば、見返りたまへる面もちもてなしなど、いとおいらか（おおどか）にて、若くうつくしの人やとふと見えたり。

（中略）

（すっかり女三の宮に心を奪われてしまった柏木は）わりなき心地の慰めに、猫を招き寄せてかき抱きたれば、いとかうばしくて（あの方の匂いがして）らうたげにうち鳴くもなつかしく思ひよそへらるるぞ、すきずきしきや。

（第三四帖「若菜」上）

②あなたのネコは、ニャンと鳴いてますか？

ますます女三の宮に恋心を募らせる柏木は、東宮を介して例の唐猫を借り受け、夜は抱いて寝るほどであった。周囲はそれを「妙なこと」と訝しんだ。

（柏木はもともとそんなに猫好きではないのだが）つひにこれを尋ねとりて、夜もあたり近く臥せたまふ。明けたてば、猫のかしづきをして、撫で養ひたまふ。人げ遠かりし心もいとよく馴れて（最初は猫も人見知りをしたが今はよく馴れてきて）、ともすれば衣の裾にまつはれ、寄り臥し、睦るるを、まめやかにうつくしと思ふ。いといたくながめて（柏木が物思いに沈んで）、端近く寄り臥したまへるに、（猫が）来てねうねうといとらうたげになけば、かき撫でて、うたてもすすむかな、とほほ笑まる。

恋ひわぶる人のかたみと手ならせば
なれよ何とてなく音なるらん

（私がこれほど恋して悩み苦しんでいるあの方の形見と思ってかわいがってみれば、猫よ、汝は何と鳴いているのか）

これも昔の契りにや、と（猫の）顔を見つつのたまへば、（猫は）いよいよらうたげになくを、懐に入れてながめるたまへり。御達（年配の女房）などは、「あやしく、にはかなる猫のときめくかな。かようなるもの（猫のようなものなど、以前は全然）見入れたまはぬ御心に」と咎めけり。

（第三五帖「若菜」下）

＊『源氏』では猫の鳴き声は「ねうねう」、後述の『更級日記』では「なごう」と記されている。

③猫の夢を見ました

運命の出会いから四年、中納言になった柏木は女三宮の姉、二の宮を正妻に迎えるが、なお妹の三の宮への思慕の念を募らせ、ついには宮に仕える女房の小侍従に「あなおほけな」（なんて大それたことを！）とたしなめられながら、それでも「ただ、一言、（思いの丈を）物越しにて聞こえ知らすばかりは、何ばかりの御身のやつれにかはあらん（どれだけ女三の宮の瑕疵になるでしょう）。神仏にも思ふこと申すは、罪あるわざかは」と訴え、小侍従からしぶしぶ「もし、さりぬべき隙あらばたばかりはべらむ。」との約束を取り付ける。そして、その日がやって来た。四月の十何日か、賀茂祭の御禊を明日に控えて人々は

忙しそうにしている。小侍従は人の出入りが少ないことを見計らって、柏木を宮の寝所近くまで引き入れる。柏木に気付いた宮は動揺して人を呼ぶが、誰も来ない。その「わななきたまふさま、水のやうに汗も流れて、ものもおぼえたまはぬ気色、いとあはれにらうたげなり。」柏木は宮が思ったほど、気高くてこちらが気後れするような人ではなく、むしろ「なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見え給ふ御けはひの、あてにいみじく思ゆることぞ」と思い、そうなると…

さかしく思ひしづむる心（女三の宮に対し、大それた、色めかしい振る舞いなど決してするまい、というような心）も失せて、いづちもいづちも（どこかに宮を）率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えてやみなばや（自分もこのまま行方をくらましてしまいたい）とまで思ひ乱れぬ。

この後、柏木が女三の宮に思いを遂げる場面があるはずだが、物語としては、すでに事終り、柏木がまどろんでいるところに飛ぶ。すると柏木は…

ただいささかまどろむともなき夢に、この手馴らしし猫（例の「ねうねう」と鳴いていた猫）のいとらうたげにうちなきて来たるを、この宮（女三の宮）に奉らむとてわが率て来たると思しきを、何しに奉りつらむと思ふほどにおどろきて（目が覚めて）、いかに見えつるならむ（なぜこんな夢を見たのだろう）と思ふ。

この後、女三の宮は「いとあさましく、現ともおぼえたまはぬに、胸ふたがりて思しおぼほるる」茫然自失のありさま。柏木があれこれ話しかけても一言も口を利かず、ただ「悲しく心細くていと幼げに泣きたまふ」ばかり。こんな時に「ただ一言御声を聞かせ給へ」という柏木が何とも煩わしく、わなわな震えてばかりいると、柏木は「いとつらき御心にうつし心も失せはべりぬ（一言も口を利いてくれないあなたの冷たい仕打ちに私の正気も失せてしまいました）」などと言う。とはいえ、柏木にとって、生身の宮をその腕に抱いたことよりも、その直後に見た「猫の夢」のほうがよほど印象的だったらしく、宮のもとを退出する際「あはれなる夢語も聞こえさすべきを」（猫が出てくる趣深い夢の話を申し上げたいと思ったけれど）、今回はできなかった。しかし「いま、思しあはすこともはべりなむ」（いずれ思い当たるような節もあるやもしれません）などと言ってみたり、その後も夢に見た「かの猫のありしさま」が恋しく、慕わしく思い出されるのであった。

とはいえ、柏木とて自らのしたことを忘れているわけではない。「さてもいみじき過ちしつる身かな」。柏木は後悔の念と破滅への恐怖に恐れおののき、自らの寿命を縮める結果となる。

（第三五帖「若菜」下）

＊江戸時代初期の『源氏物語』の注釈書、中院通勝の

『岷江入楚』は、獣の夢を見ることを懐妊・懐胎のしるしとする。

日記・随筆

菅原孝標女『更級日記』

平安時代中期（一一世紀中ごろ）成立

○ニャゴニャゴ、ニャゴ〜ンと鳴くあのネコは、
もしかして、大納言様の姫君ではニャイかしら？

花の咲き散る折ごとに、乳母亡くなりし折ぞかし、とのみあはれなるに、同じをり亡くなりたまひし侍従の大納言の御むすめの手を見つつ、すずろにあはれなるに、五月ばかり、夜ふくるまで物語を読みて起きゐたれば、来つらむ方も見えぬに、猫のいとなごう鳴いたるを、おどろきて見れば、いみじうをかしげなる猫あり。いづくより来つる猫ぞ、と見るに、姉なる人、「あなかま、人に聞かすな。いとをかしげなる猫なり。飼はむ」とあるに、いみじう人馴れつつ、かたはらにうち臥したり。尋ぬる人やあると、これを隠して飼ふに、すべて下衆のあたりにも寄らず、つと前にのみありて、物もきたなげなるは、ほかざま（他所）に顔をむけて、食はず。

姉おとと（姉と妹のこと）の中につとまはれて、をかしがりらうたがる（可愛がる）ほどに、姉のなやむこと（病気）あるに、もの騒がしくて、この猫を北面にのみあらせて呼ばねば、かしがましく鳴きののしれども、なほさるにてこそはと思ひてあるに、わづらふ姉おどろきて、「いづら、猫は。こち率て来」とあるを、「など」と問へば、「夢にこの猫のかたはらに来て、おのれは侍従の大納言殿の御むすめの、かくなりたるなり。さるべき縁のいささかありて、この中の君（作者のこと）のすずろにあはれと思ひ出でたまへば、ただしばしここにあるを、このごろ下衆の中にありて、いみじうわびしきこと、といひていみじう泣くさまは、あてにをかしげなる人と見えて、うちおどろきたれば、この猫の声にてありつるが、いみじくあはれなるなり」と語りたまふを聞くに、いみじくあはれなり。

その後はこの猫を北面にも出ださず、思ひかしづく。ただ一人ゐたるところにこの猫がむかひゐたれば、かいなでつつ、「侍従の大納言の姫君のおはするな。大納言殿に知らせたてまつらばや」といひかくれば、顔をうちまもりつつ、なごう鳴くも、心なし、目のうちつけに、例の猫にはあらず、聞き知り顔にあはれなり。

（中略）

そのかへる年（翌年）、四月の夜中ばかりに火の事ありて、大納言殿の姫君と思ひかしづきし猫もやけぬ。「大納言殿の姫君」と呼びしかば、聞き知り顔に鳴きて歩み来などせしかば、父なりし人も「めづらかにあはれなることなり。大納言に申さむ」などありしほどに、いみじうあはれにくちをしくおぼゆ。

（「家居の記」治安二年〈一〇二一〉三月つごもりがた）

＊侍従の大納言…能書家で書の「三跡」に数えられる藤原行成のこと（残る二人は小野道風と藤原佐成）。鎌倉中期の説話集『十訓抄』によれば、藤原実方とトラブルになった時、行成は沈着冷静に対応し、一条天皇に賞せられた。その娘（四女）は一二歳で藤原道長の末子（六男）長家と結婚したが、治安元年（一〇二一）三月、一五歳で早世。『更級日記』の作者菅原孝標女とはほぼ同い年（孝標女は一歳年下）で、孝標女は上京後、父から「書の手本」にしなさいと、かの姫君が書いた古歌などを渡されて、日ごろから敬愛していたのだった。

作り物語

六条斎院宣旨『狭衣物語』

平安時代後期（一一世紀後半）成立

○猫は、愛しい人と「私」とを結ぶ大切なよすがなのです

帝の正嫡でありながら源氏を賜って臣籍に下り、関白として一条院や嵯峨院ら（実の兄弟）を支える「堀川の大臣」と「堀川の上」の子がこの物語の主人公「狭衣大将」である。狭衣は、母堀川の上の姪で故先帝の皇女、今は父堀川の大臣に引き取られ、養女として暮らしている従妹の「源氏の宮」を思慕するが、源氏の宮は狭衣の求愛を拒否しつづける。

『狭衣物語』は、狭衣と源氏の宮との不毛の愛を軸に据えて、狭衣の消極的な態度がもたらした、飛鳥井の女君、女二の宮、一品の宮、式部卿の宮の姫君などとのさまざまな愛の悲劇を語ったものであり、狭衣は両親に手厚く庇護され、無類の美貌と才能に恵まれ、官位の昇進もめざましく、神意によって出家することもなく、最後は帝位に即くという、外見は何の不足もない境遇にありながら、本意の恋人、源氏の宮は得られず、心ひかれる女二の宮とは行き違いとなってしまい、常に不如意の身の上を嘆き、憂愁の思いを抱いている。

（新編日本古典文学全集『狭衣物語②』所収　小町谷照彦「古典への招待」）

さて、一品の宮と意に染まぬ結婚をすることになってしまった狭衣は、堀川の自邸はもとより、どこへ行っても居場所がなく、鬱々としながら源氏の宮のいる斎院に赴くのだった。すると…

（源氏の宮の）御側に寝入りたる猫、鳴き出でて、端ざまへ出づる。綱に御几帳の帷子の引き上げられて、（源氏の宮と狭衣は思いがけず互いの顔を）見合せたまへば、（源氏の宮は）御顔いと赤くなりながら、わざと（ことさら奥に）引き入りなどはせさせたまはず、御扇に紛らはして（扇をかざして御顔を隠し）、少し傾かせたまふ、まみ（目元）、頬つき、髪ざし、

御髪のかかり、げに光（光り輝くような御姿）とはこれを言ふにやと見えさせたまふにも、（それに引きかえ、自分自身は）あな心憂の身のさまや、いとかばかりなる事こそ叶はざらめ（源氏の宮のような方と結ばれることこそ叶わないとしても）、少しもなぞらへなる世をば見るまじきものと、思ひ知られしより（少しでもこの方に似通ったような人と結ばれたいと思ったが、それもかなわぬものと思い知らされて）、これに劣りたらん人をば見じ聞かじと、思ひ初めにしこそ（思うようになったのだが）、いでや、我が心のよろづに言ふかひなくて、親にもひとへに任せられたてまつりて（親の意向にひたすら従わされることになり）、心づからいと憂き世にも長らふることぞかしと思ふにも、身より外につらき人なくて、涙のみぞことわり知らぬものなりければ（涙ばかりは理屈と無関係に、とめどなく流れてしまうのであった）。

（さて、狭衣が）猫を「こちや」とのたまへば、（猫は）らうたげなる声にうち鳴きて、近く寄り来たる、（その猫に源氏の宮の）御衣の移り香うらやましうて、（狭衣は思わず猫を）かき寄せたまへれば、御袖より入らんと睦るる、いとうつくし（可愛らしい）。

（狭衣は十歳近くも年上の一品の宮との結婚が）いと堪へがたくて、くねくねしうわびしき目を見つつ、長らふるよりは、かくこそあるべかりけれ（いっそ源氏の宮の移り香も濃厚な、この猫といっしょに暮らしたい）と思されて、「この御猫、しばし預けさせたまへかし。人肌つける春を求むるよりは」とのたまふを、宣旨といふ人（女房）うち笑ひて、「今更は、などてか（今更、なぜそんなことをおっしゃるのですか）。人は誰をかは求めさせたまはん。いと大人しき御扱ひをさへせさせたまふなるに（たいそう大人びた方を奥方にお迎えになり、お世話していらっしゃるというのに）、猫は所狭う思されめ」と聞こゆれば、「さらなりや（もちろんです）。（私たち夫婦の仲は）岩間を潜る水だにも漏るまじければ」とて、うち笑ひたまふものから、いとかかる心の中も、（源氏の宮は）今は知らせたまはねば、（私が出家の望みを）思ひ直りて、いつしかゆかり思ひをさへして、思ひ扱ふらんと、聞かせたまふらんかし、同じさまながらだに見えきこえさせじものをと、恥づかしくおぼえたまふを、（狭衣は）前なる人々（源氏の宮の御前に仕えている女房たち）の絵描き散らしたる筆どもの散りたるを、取りたまひて、紙の端に、

かつ見るも　あるはあるにも　あらぬ身を
　　人は人とや　思ひなすらん

（あなたをこんなに慕いつつ、一方で別の人と結婚しているこの私は、生きているとはいいながら、全く生きている心地もいたしません。なのにあなたは、きっと私が普通の人のように、何の悩みもなく生きているとお思いなのでしょうね……）

手すさみのやうに、片仮名に書きて、この猫の首に結びつけて、「あな、寝ぎたな（ああ、ぐっすり寝ているね）。今は起きて参りね」と押し出でたまへれば、（猫は）聞き知り顔に、他

所ざまにも行かず、（源氏の宮のもとに）参りて睦れまゐらするぞうらやましきや。

（巻三）

＊『狭衣物語』の作者は源頼国女とされている。頼国女は後朱雀天皇の皇女禖子内親王（六条斎院）に仕えた女房で、宣旨はその筆頭格にあたる。なお、源頼国は源頼光の長男であり、満仲の孫にあたる。

日記

藤原頼長『台記』　　**平安時代末期（一二世紀前半）成立**

○後に「悪左府」の名で呼ばれることになるこの私も、うちのネコが病気になった時、千手観音にお祈りしたんですよ

僕少年養レ猫、猫有レ疾、即画二千手像一、祈レ之曰、請疾速除愈（意味は癒に同じ）、又令三猫満二十歳一、猫即平癒、至二十歳一死、斂衣入櫝葬也

（康治元年〈一一四二〉八月六日の条）

【大意】

私は年少のころ猫を飼っていた。ある時、猫が病気になったので、私は千手観音の絵像を描いて病気が早く治るようお祈りをした。そしてまた、うちの猫に十年の寿命をお与え下さい、ともお願いした。そうしたら、立ちどころに猫の病気も癒えて、本当に十年で死んだのだよ。（割注）猫が死んだ時は、遺骸を衣にくるんで棺に入れ、埋葬した。

＊藤原頼長（一一二〇～五六）は摂政関白太政大臣藤原忠実の三男。通称「宇治左大臣」「悪左府」。鳥羽院政下、朝廷は皇位継承争いと摂関家内部の確執を背景に待賢門院腹の崇徳院方と美福門院の推す後白河天皇方に分かれ、両者の対立がついに武力衝突に発展する。後世「武者の世」（慈円『愚管抄』）の始まりとされる保元の乱（一一五六）である。頼長は保元の乱に際し、父忠実とともに崇徳院方につき、流れ矢にあたって敗死するも、死後怨霊と化し、安元三年／治承元年（一一七七）正一位・太政大臣を追贈される。

＊『台記』は原漢文。保延二年（一一三六）～久寿二年（一一五五）の記録。右は康治元年（一一四二）八月六日の記事。当時、頼長は自らの鯰膚の治療と祈祷のために三尺の千手観音を造立し、僧に命じて前月の十六日から「三七日」（二一日間）の供養を行わせていた。その満願の日が八月六日であり、千手観音の霊験と、そのありがたい御利益の一例として、ここに幼いころの猫の思い出が記されたものと思われる。

＊本文は橋本義彦・今江広道校訂〈史料纂集〉『台記』第

一（続群書類従完成会、一九七六・一二）に拠る。なお、本文の訓読は〈増補史料大成〉『台記』一（臨川書店、一九六五・一一）を参考にした。

史書

藤原通憲（信西）『本朝世紀』

平安時代末期（一二世紀中ごろ）成立

○ネコ、人を襲う!!

近日。近江国甲賀郡及美乃国山中有二奇獣一。夜陰群二入村閭一。嚙二損児童一。或嚙二人手足一。土俗号二之猫一。仍有レ人斂二此獣一。剥二其皮一者所々有レ之。其間有二種々訛言一。尤為二奇誕事一。

（第三八「近衛天皇・自久安六年七月至同年十二月」）

＊『本朝世紀』は平安時代末期、鳥羽上皇の命により藤原通憲（信西）が編纂した歴史書。同書は『日本書紀』から『日本三代実録』に至る「六国史」に続く正史として、宇多天皇（在位八八七～八九七年）から近衛天皇（在位一一四二～一一五五年）までを扱っているが、後白河院政下、院の近臣として勢力を拡大していった信西は平治元年（一一五九）一二月、後白河院の近臣藤原信頼が起こしたクーデター（平治の乱）によって自害に追い込まれ、その首は獄門にさらされたため、史書の編纂事業も中絶、未完に終った。もと全二〇巻。現存するのはその一部で、朱雀天皇の承平五年（九三五）から近衛天皇の仁平三年（一一五三）まで、二百年分以上が残存。そのなかに右のような「奇誕」なるネコの話が記録されている。ちなみに、「奇誕」とは虚妄の説のこと（「誕」はうそ、いつわり、でたらめの意）。

＊本文は新訂増補〈国史大系〉『本朝世紀』（吉川弘文館、初版一九三三・八、新装版一九九九・一二）に拠る。

仏教説話集

『今昔物語集』

平安時代末期（一二世紀中ごろ）成立

○ネコ嫌いには 壮絶！ 悶絶！ 恐怖のネコ部屋大作戦!!

（ネコ好きにはパラダイスですけど…）

大蔵省に勤める従五位下の藤原清廉は「大蔵の大夫」と呼ばれていた。しかし、前世がネズミだったのか、「いみじく猫になむ恐ける」人であった。そのことを知っていた悪戯好きな若い男たちは清廉の行く先々で猫を取り出して見せるので、彼はそのたびに用事も何も投げ出して「顔をふさぎて逃げて去りぬ」という有様。そこで人々は清廉に「猫恐（ねこおぢ）の大夫」とあだ名を付けた。

清廉は山城・大和・伊賀に荘園を持っており、たいそう財産を持っていたはずだが、公（朝廷）に対して租税を納めようとしなかった。そこで藤原輔公が大和守だったとき、一計を企んだ。猫嫌いの清廉を小さな部屋に押し込んで、そこに猫を放ったのである。「灰毛斑なる猫の長一尺余りばかりなるが、眼は赤くて、虎珀（琥珀）を磨き入れたるやうにて、大声を放ちて鳴く。ただ同じやうなる猫五ツ続きて入る。その時に清廉、目より大きなる涙を落として、守（大和守）に向かひて手を摺りて迷ふ。」

清廉は真青になって大和守のいう通り、税を納めることを確約した。これが伝わると、「世こぞりて咲あへり、となむ語り伝へたるとや。」

（巻第二八「本朝付世俗」第三一「大蔵大夫藤原清廉、猫に怖るる語」）

和歌

撰者不明『古今和歌六帖』　　**平安時代後期（一〇世紀後半）成立**

○虎か？　猫か？　それとも？

あさぢふの　小野の篠原　いかなれば
手飼ひのとらの　ふしどころみる

（第二「山」九五二番歌　読人知らず）

＊『古今和歌六帖』は平安時代に成立した撰者不明の私撰和歌集。約四五〇〇首を類題別に収録。所収歌の本文と通し番号は『新編　国歌大観』第二巻「私撰集編　歌集」（一九八四・三）に拠る。なお、右九五二番歌は、一部言い回しの異なる形で『夫木和歌抄』巻第二七に収録されている（一二九二五番歌、後出）。

＊『古今和歌六帖』は、現在古今和歌六帖輪読会（代表平野由紀子）が初の全注釈に取り組んでおり、御茶ノ水女子大学E-bookサービスにて第四帖まで公開中。なお、同会の注釈では右九五二番歌の結び「ふしどころみる」を不自然と見て、校合本により「ふしどころなる」と改め、この歌の真意を「親の監視のきびしい娘に近づけないことを恨んだ男の歌か。」と記す。

＊「手飼ひの虎」というのは「人に飼いならされた虎」のことだが、いうまでもなく日本に虎はいない。仮にいたとしても、あまりに危険すぎて、普通は飼おうとは思わない。飼いならせるとも思わない。日本で生きた虎を間近に見ることができるようになったのは明治以後の話である。だが、虎（寅）そのものは中国からもたらされた知識・文物あるいは虎の皮などを通して、記紀万葉の時代からすでに知られていた。ちなみに、久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九・五）は、「虎」の例歌として『古今和歌六帖』の「人妻は森か社か唐国の虎ふす

野辺か寝て試みむ」（第五・二九七八）を引き、「虎を人妻との危険な恋のたとえに用いている。他にも、人妻への恋情を表す歌に詠み込まれた例は多い。」（「虎」中周子）とする。であるならば、前出古今和歌六帖輪読会の解釈のごとく、「手飼ひの虎」をうかつに近づくことができない危険な恋の相手（の比喩）とみる説も首肯できるところであろう。

＊なお、「手飼ひの虎」は、一般的には「猫」「家猫」「飼い猫」と解されている（『日本国語大辞典』第二版）。平安時代の辞書、源順の『倭名類聚抄』は中国の字書『玉篇』を引用し、「猫」を「似虎而小、能捕鼠、為粮」と記しているが、おそらく虎の実物を見たことのない大多数の日本人にとって、虎はむしろ、大きな、そして凶暴な、恐ろしい野生の猫としてイメージされていたはずであり、いわばそのイメージを反転させたのが「手飼ひの虎」という表現であろうと思われる。とするならば、猫は鼠をよく捕る益獣であると同時に、天皇以下高位の貴族たちには愛玩動物であり、かつ、どんなに飼いならしても手に負えないところのある「小さな虎」でもあった、ということになろう。

和歌

藤原長清撰『夫木和歌抄』　鎌倉時代後期（一四世紀初頭）成立

①ノラ猫も、唐猫も

十題百首

余所にだに夜床も知らぬ　のら猫の
なく音はたれに契りおきけん

（巻第一七　雑部九　動物部「猫」一三〇四三番歌　寂蓮法師）

寄野恋

真葛原したはひ歩くのら猫の
なつげかたきは妹がこころか

（同　一三〇四四番歌　源　仲正）

御集

敷島の大和にはあらぬ唐猫の
君がためにぞ求め出でたる

（同　一三〇四五番歌　花山院御製）

此御歌は、三条の太皇太后宮よりねこやあるとありしかば、人のもとなりしがをかしげなりしをとりてたてまつりしに、あふぎのをれをふだにつくりてくびにつなぎてあそばされし御うたと云云

＊寂蓮法師…平安末期～鎌倉初期（一二世紀後半）の僧侶・歌人。藤原俊成の甥で、俊成の養子となり、のちに出家して寂蓮を名乗った。「十題百首」は建久二年（一一九一）藤原良経が主催した歌会で、良経・慈円・寂蓮・定家が集い、四人で天・地・居処・草・木・鳥・獣・虫・神祇・釈教、それぞれについて十首の歌を詠むという歌会であった。なお、寂蓮の歌について、〈復刻版〉校註『國歌大系』第二二巻「夫木和歌抄」下巻（講談社、一九七六・一〇。原版は一九三一年刊行）は、「夜床」ではなく「夜毎」とする。

＊源 仲正…平安後期（一一世紀末～一二世紀ごろ）の武士・歌人。

＊花山天皇…平安中期（一〇世紀末～一一世紀初）の天皇（第六五代）。六三代冷泉天皇の第一皇子。次代の天皇が『枕草子』「翁まろ事件」の一条天皇である。当時の猫人気がうかがわれる資料でもある。

＊三条の太皇太后宮…第六一代朱雀天皇の第一皇女、昌子内親王。冷泉天皇の中宮。

＊『夫木和歌抄』（『夫木和歌集』とも）は鎌倉時代後期に成立した私撰和歌集。過去の勅撰集（『万葉集』を含む）に漏れた和歌を収集・採録。その数一万七千首以上。収録歌人の数はおよそ一千人に及ぶ。撰者は遠江（今の静岡県西部）勝間田城の城主藤原長清。長清が師と仰いだのは定家の孫冷泉為相（父は定家三男藤原為家、母は『十六夜日記』の阿仏尼）。歌集じたいは「中世編」に置くべきだが、右の「猫」歌三首は平安時代に詠まれたものとして「古代文学編」に収載する。

②猫だろうが虎だろうが、それが誰の「手飼」であっても、結局私たちの思うようにはならないものなのです…

人心 手飼ひの虎に あらねども
　　馴れしもなどか 疎くなるらん
（巻第二七 雑部九 動物部「虎」一二九一八番歌　土御門院御製）

あさぢふの 小野の篠原 いかなれば
　　手飼ひの虎の ふしどなるらん
（同 一二九二五番歌　読人知らず）

＊以上、『夫木和歌抄』所収歌の本文と通し番号は『新編 国歌大観』第二巻「私撰集編 歌集」（一九八四・三）に拠る。なお、通読の便を考慮して私に漢字をあてた。

＊ちなみに、一万七千首もの和歌を収録している『夫木和歌抄』は、その巻第二七にネコの歌を三首（「手飼ひの虎」を含めると五首）挙げているが、これに対して、ネズミは八首、クマも八首、イノシシと野干（キツネ）は一二首、ウシとサルが一六首、ウマはなんと四六首も詠まれている。

■ちょっと寄り道 ―勅撰集に詠まれたネズミ!?

おしあゆ（押し鮎）
はしたかの をきゑ（置き餌）にせんと かまへたる
おしあゆかすな ねずみとるべく
（『拾遺和歌集』巻第七「物名（もののな）」四一〇番歌　すけみ）

ねずみのこと（琴）のはら（腹）にこ（子）をうみたるを
年をへて 君をのみこそ ねずみ（寝住み）つれ
ことはら（異腹）にやはこ（子）をばうむべき
（同 四二一番歌　すけみ）

＊『拾遺和歌集』は『古今和歌集』『後撰和歌集』に次ぐ第三勅撰集。花山天皇親撰とも伝えられる。一条天皇の御代、寛弘三年（一〇〇六）ごろの成立か。

＊しかし、ネズミですら勅撰集に詠まれているというのに、ネコは『古今和歌集』から南北朝期に成立した准勅撰集『新葉和歌集』を含む二二種の勅撰集のどこにも登場しない。久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九・五）によれば、「特に王朝から中世においては和歌に詠まれることが少なく、むしろ、狂歌、俳句に詠まれることが多い素材である。（中略）和歌よりも貴族生活の中に印象的な場面が多い。」（「猫」執筆高田祐介）とする。

吾輩も猫である
――日本文学史の中のネコたち【中世文学編】

史書
『吾妻鏡』
鎌倉時代末期（一三世紀末～一四世紀初頭）

○銀でできたネコ、ほしければあげるよ

十六日庚寅。午剋。西行上人退出。頻雖抑留。敢不拘之。二品以銀作猫。被宛贈物。上人乍拝領之。於門外与放遊嬰児云々。（以下略）

（文治二年〈一一八六〉八月十六日の条）

【大意】

文治二年（一一八六）八月十六日、庚寅の日。午の刻（昼ごろ）、西行上人が退出した。人々はもうしばらく、としきりに引き留めたが、上人はあっさり行ってしまった。この時、頼朝は銀作りの猫を西行に贈った。ところが、上人はこれを拝領しながら、これまたあっさり門の外で遊んでいた子どもたちに与えてしまったという。

＊「二品」は官位二位のこと。ここでは源頼朝を指す（頼朝は文治元年に従二位、文治五年に正二位に叙されている）。この時、西行は重源上人の意を体して奥州に向かう途中であった。戦火に焼かれた東大寺の大仏再建費用（砂金）勧進のためである。なお奥州藤原氏は西行と同族、親類であった。

＊本文は新訂増補〈国史大系〉『吾妻鏡』前篇（吉川弘文館、新装版二〇〇〇・三）に拠る。また、本文の訓読は貴志正造訳注『全訳吾妻鏡』第一巻（新人物往来社、一九七六・一〇）を参考にした。

説話集
『宇治拾遺物語』
院政期末～鎌倉時代前半（一二世紀後半～一三世紀前半）

○ニャんニャのコレは？　もしかして、ニャにかの暗号？

今は昔、小野篁といふ人おはしけり。嵯峨帝の御時に、内裏に札を立てたりけるに、「無悪善」と書きたりけり。帝、篁に「読め」と仰せられたりければ、「読みは読み候ひなん。されど恐れにて候へば、え申し候はじ」と奏しければ、「ただ申せ」とたびたび仰せられければ、「さがなくてよからんと申して候ふぞ。されば君を呪ひ参らせて候ふなり」と申しければ、「おのれ放ちては誰か書かん」と仰せられければ、「さればこそ、申

し候はじとは申して候ひつれ」と申すに、御門、「さて何も書きたらん物は読みてんや」と仰せられければ、「何にても読み候ひなん」と申しければ、片仮名の子文字を十二書かせて給ひて、「読め」と仰せられければ、「ねこの子のこねこ、ししの子のこじし」と読みたりければ、御門ほほゑませ給ひて、事なくてやみにけり。

（巻第三の一七）

＊『宇治拾遺』に多いのは馬、蛇、犬、狐。まれに猿、猪、蛙、雀、牛、ムササビ、あるいは鯰。また異国の話として虎、羊なども登場するが、実際に猫が出てくる話は一話もない。ちなみに、巻第一二の一九「宗行が郎等、虎を射る事」では、新羅の話として「虎はまづ人を食はんとては、猫の鼠を窺ふやうにひれ伏して、しばしばかりありて、大口をあきて飛びかかり、頭を食ひて肩にうち掛けて走り去るといふ」とあるが、これもやはり言葉だけである。

説話集

橘成季『古今著聞集』　　**鎌倉時代、建長六年（一二五四）成立**

①うつくしき唐猫　元祖「キャッツ・アイ」？

観教法印が嵯峨の山庄に、うつくしき唐猫のいづくよりともなく出で来たりけるを、とらへて飼ひけるほどに、件の猫、玉をおもしろく取りければ（猫が上手にお手玉で遊ぶので）、法印愛してとらせけるに、秘蔵の護り刀を取り出でて玉に取らせけるに、件の刀をくはへて、猫やがて逃げ走りけるを、人々追ひて捕らへんとしけれどもかなはず、行くかたを知らず、失せにけり。この猫、もし魔の変化して、護りを取りて後、はばかるところなく犯して侍るにや。おそろしき事なり。

（巻第一七「変化」第二七　第六〇九話「観教法印が嵯峨山庄に飼はれたる唐猫、変化の事」）

＊観教法印…御願寺僧正（九三四～一〇一二年）。俗名源信輔。三条天皇（冷泉天皇の第二皇子、在位一〇一一～一〇一六年）が東宮だった頃からの護持僧（天皇のために加持祈祷を行う僧侶）。

②からだが光るネコ

保延の比（保延年間は一一三五～四一年、崇徳天皇の治世）、宰相の中将なりける人（参議＝宰相で近衛中将を兼務する人）の乳母、猫を飼ひたり。その猫たかさ一尺、力のつよくて綱をきりければ、つなぐこともなくて、はなち飼ひけり。十歳にあまりける時、夜に入りて見ければ、せなかに光あり。かの乳母、つねにこの猫に向ひて、「汝死なん時、われに見ゆべからず」と教へけるは、いかなるゆゑにか、おぼつかなき事なり。十七

になりける年、行方を知らず失せにけり。
（巻第二〇「魚虫禽獣」第三〇　第六八六話「宰相中将の乳母が飼ひ猫の事」）

③わたくし、ネズミは食べませんのよ。ホホホホホ…

或る貴所に、しろねといふ猫を飼はせ給ひける。その猫、鼠・雀などをとりけれども、あへて食はざりけり。人の前にて放ちける、不思議なる猫なり。
（巻第二〇「魚虫禽獣」第三〇　第六八七話「或る貴所の飼ひ猫、鼠雀等を取るも食はざるの事」）

＊「しろね」とは白猫（しろねこ）のことか？　名前からしていかにも上品そうなネコである。また「貴所」で飼われているとされているところから、「しろね」がエサに困っているとは考えにくい。動物行動学的にいうと、「しろね」のような行動は、狩りの成果を見せびらかしているのではなく、親が子にエサを持ち帰って食べさせようとするのと同じだと考えられているようである。

軍記物語

『平家物語』

鎌倉時代（一三世紀中ごろ～一四世紀初頭）成立

○そりゃあ、私は「猫」ですけどね（だからって、ナメんなよ！）

平家一門を打ち破って上洛した木曽義仲は、後白河法皇から左馬頭の位と「朝日将軍」の称を与えられる。だが、二歳から三十になるまで木曽で暮していた義仲は礼儀も知らず、都の風をも知らず、何かにつけて傍若無人なところがあった…

あるとき猫間中納言光隆卿といふ人、木曽に宣ひあはすべき事あッておはしたりけり。郎等ども、「猫間殿の見参にいり、申すべき事ありとて、いらせ給ひて候」と申しければ、木曽大きにわらッて、「猫は人にげんざう（見参）するか」。「これは猫間の中納言と申す公卿でわたらせ給ふ。（猫間というのは）御宿所の名（京都七条坊城壬生近辺）とおぼえ候」と申しければ、木曽「さらば」とて対面す。なほも猫間殿とはえいはで、「猫殿のまれまれわいたる（おはす＝わす＝来る）に物よそへ（食事を用意せよ）」とぞ宣ひける。（中略）飯うづたかくよそひ、御菜三種して、平茸の汁で参らせたり。（中略）猫間殿は合子（ふたのついた椀）のいぶせさに（見苦しいので）召さざりければ、「それは義仲が精進合子ぞ」。中納言召さでもさすがあしかるべければ、箸とッて召すよししけり（食べるふりをした）。木曽

これを見て「猫殿は小食におはしけるや。きこゆる猫おろし（猫が食べ物を残すこと）し給ひたり。かい給へ（かきこみなされ）」とぞせめたりける。中納言かやうの事に興さめて、宣ひはすべきことも一言もいださず、やがていそぎ帰られけり。

（巻第八「猫間」）

日記

藤原定家『明月記』

平安末期～鎌倉時代（一二世紀後半～一三世紀前半）

①うちの猫、野良犬にかみ殺されてしまいまして…、正直ツライです。

四日、陰晴雨灑、天明（明け方）退出の間、去々年より養ふところの猫、放犬のために噉殺せられ、曙の後（その犬を）放出すると云々。年来、予、更に猫を飼はず。女房、この猫を儲けて後、日夜これを養育す。悲慟（なげきかなしみ）の思ひ、人倫に異ならず。鶴を軒（大夫の乗る車）に乗せ、犬に綬（勲章）を帯すを耻づ、といへども、（この猫は）三年以来、掌上・衣裏に在り。他の猫、時々啼き叫ぶことあり（といえども）この猫はその事なし。荒屋の四壁全からず、隣家とはその隔て無きが如し。放犬多くして致すところか。

（承元元年〈一二〇七〉七月四日の条）

【大意】

七月四日、晴れたり曇ったり、雨もパラつくはっきりしない天気だった。その日の明け方、私が務めから戻ると、一昨年から飼っていた猫が野良犬にかみ殺されたという。私はそれまで猫を飼ったことはなかったが、妻がこの猫を飼い始めてからというもの、日夜養育し、慣れ親しんできた。いま、猫を失った嘆き悲しみは、親しい人を失った悲しみと全く変わらないものであることに気付いた。世の中では動物を人と同じように遇することを愚かなこと、恥ずべきことと戒める風があるが、我が家の猫は、三年来、私たちの掌の上にあり、また衣の内に入れて大切に育んできた。よその猫は時々騒々しく鳴きわめくようなこともあったが、うちの猫は決してそういうことはなかった。残念なのは、我が家の作りが粗末で、四方の壁もしっかりしていなかったことだ。隣の家との境や隔ても、あってなきが如し。だから、こんなことになってしまったということか…。

＊『明月記』は治承四年（一一八〇）から嘉禎元年（一二三五）まで、五六年間にわたる藤原定家の日記である（原漢文）。右本文は限定版『明月記』第三（国書刊行会、一九六九・九）に拠る。本稿では、今川文雄『訓読明月記』全六巻（河出書房、一九七七～七九）を参考にしつつ、私に訓読を試みた。以下同じ。

②野獣「猫また」出現！　死傷者多数!!

二日甲戌。終日陰る。西北の方、雨降ると云々。この辺は然らず。夜前南京の方より使者小童来たりて云ふ。当時（現在の意）南都に猫胯と云ふ獣出来。一夜に七八人を噉ふ。死者多し。或はまた件の獣を打ち殺す。目は猫の如く、その体、犬の長さの如しと云々。二条院の御時（在位一一五八～一一六五年）、京中にこの鬼来たる由。雑人また猫胯の病と称し、諸人病悩の由、（定家自身が）少年の時、人これを語る。もし京中に及ばば、極めて怖るべきことか。

（天福元年〈一二三三〉八月二日の条）

＊定家はここで二条院時代に起きた猫股騒動についても記しているが、藤原通憲（信西）が編纂した史書『本朝世紀』第三八、久安六年（一一五〇）の記事に、近江国と美濃国の山中に「奇獣」が出現し、子どもたちを襲った。土地の者たちはその「奇獣」のことを「猫」と呼んだ、とある。定家が「少年の時」聞いたというのは、あるいはこの話か。

＊『明月記』の記事は「猫また」に関する最古の記録。絵空事でも作り話でもなく、定家自身が実際に人から聞いた話であり、事実としてこれを記録している点が貴重である。

日記・回想録

健御前『たまきはる』　　鎌倉時代初期（一三世紀初頭）

○うちの姫様がお美しい唐猫になった夢を見ました…。嗚呼…

また大女院（八条院）の御色着たるころ、八条殿にて、人〳〵の経読ませ給ふに交じりて、（春華門院のもとへ）久しく参らぬころ、（春華門院が）幼くおはしましを、抱きまいらせていたると思ふほどに、唐猫のうつくしげなるにてをはしましける（そんな夢を見た）、「あなあさまし。いかなる事ぞ」と思ひて、うちおどろきたりしに、心騒ぎて、心の及ぶ程、方〳〵に御祈りせさせ、又さぶらひ合はるゝ人〳〵にも、御祈りの事をのみ申しやりしかど、人はさしも思ひ合はれず、（春華門院が順徳天皇の大嘗会の）御祓への行幸の御桟敷をのみ、出で立ち合はれたりしに、かゝる尼の身に、申し出づべくもなかりし事を、例の身の上かへりみぬ心の癖に、二位殿（藤原兼子）に参りて、思ひし事どもを申したりしに、その御幸のとまりにしを、限りなくうれしと思ふかひもなく、例ならぬ御事さへ出で来ぬ。

（遺文）

＊作者健御前は藤原俊成の娘で、藤原定家には五歳年長の同母姉。保元二年（一一五七）生れ。建保七年（一二一九）

ごろに亡くなったと推定。一二歳で建春門院（平滋子。清盛の正室時子の異母妹。後白河院の妃となり、高倉天皇を産み国母となる）に仕え、「建春門院中納言」と呼ばれた。建春門院が若くして亡くなった後は、およそ三〇年もの長きにわたって八条院（鳥羽院の皇女。崇徳・後白河の異母妹。近衛天皇の同母姉）に仕え、「八条院中納言」と称された。

＊本作は鎌倉時代初期、当時六三歳の健御前が往時の平安朝を振り返って筆録した回想録である。題名は冒頭の和歌から付けられた通称で原題はない（「たまきはる」は「いのち」に係る枕詞）。内容的には健御前自身が生前にまとめた本編（第一部）と、健御前没後、書き捨ててあったものを定家が編纂した遺文（第二部）からなる。本編奥書によれば成立（清書終了）は建保七年（一二一九）三月三日、遺文の成立は貞応元年（一二二二）ごろと推定されている。

＊右の唐猫の記事は建暦元年（一二一一）の出来事。話題になっている春華門院は後鳥羽院の皇女（昇子内親王）で、八条院の猶子として育てられ、後に異母弟順徳天皇の准母となった。その養育の任にあたったのが健御前である。ところが春華門院は、建暦元年六月、八条院が七五歳で亡くなった後、病に伏せるようになり、同年十一月にはこの世を去ってしまう。健御前、当時五五歳。春華門院、わずか一七歳。遺文冒頭部は早世した春華門院追慕の記事であり、健御前は幼い頃からお世話してきた春華門院の不調を夢で察知した、その予兆があった、ということを書き綴っている。つまり、唐猫の夢は吉兆ではなかったのである。

＊本文は三角洋一校注〈新日本古典文学大系〉『とはずがたり・たまきはる』（岩波書店）に拠る。ただし、通読の便を考え、一部送り仮名を補っている。

随筆

兼好法師『徒然草』

鎌倉時代末期～南北朝時代（一四世紀中ごろ）成立

○「猫また」かと思ったら…、なぁんだ（笑）

「奥山に、猫またといふものありて、人を食らふなる」と人の言ひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の経あがりて、猫またに成りて、人とる事はあなるものを」と言ふ者ありけるを、何阿弥陀仏とかや、連歌しける法師の、行願寺の辺にありけるが聞きて、ひとり歩かん身は、心すべきことにこそと思ひける比しも、ある所にて夜ふくるまで連歌して、ただひとり帰りけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫また、あやまたず足許へふと寄り来て、やがてかきつくままに、頸のほどを食はんとす。肝心も失せて、防がんとするに、力もなく足も立たず、小川へ転び入りて、「助けよや、猫また、よやよや」と叫べば、家々より松どもともして走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こは如何に」とて、川の中より抱き起こしたれば、連歌の掛物取りて、扇・小箱など懐に持ちたりけるも、水に入

りぬ。稀有にして助かりたるさまにて、はふはふ家に入りにけり。飼ひたる犬の、暗けれど主を知りて、飛び付きたりけるとぞ。

（第八九段）

狂言

『鶏猫』

室町時代

○うちのタマ知りませんか？

あるとき、伊予の国の大名河野某（なにがし）秘蔵の猫が行方知れずになった。河野は太郎冠者に命じ、「猫の行方を申し来たる者あらば、勲功は乞ふによるべし」と書いた高札を立てさせる。すると一人の少年が訪ねてくる。聞けば、藤三郎という男が猫を殺してしまったという。激怒した河野はさっそく太郎冠者に藤三郎召し取りを命じるが、何しろ相手は大力で手ごわい。臆病な太郎冠者は、次郎冠者、三郎冠者まで呼び出し、三人がかりで藤三郎を捕らえることに成功する。

殿様の前に引き出された藤三郎は、当初、知らぬ存ぜぬで押し通そうとするが、そこに証人があらわれる。なんと、藤三郎を訴人したのは彼自身の子どもであった。藤三郎も是非に及ばず、なぜ猫を殺したのか白状する。

「何を隠しませうぞ、私も秘蔵の鶏（にはとり）を飼うて居りましたが、この間何処（いづく）からやら猫が参り、鶏をくはへて逃げまするによって、何心なう打ち殺いてござる。見ますれば承り及うだ御秘蔵の猫でござる。もしこのことが知られましたならばお咎めもあらうと存じ、深く隠いてござる。」

それを聞いた河野は、藤三郎を猫の仇（かたき）、と一討ちにしようとする。すると今度は、藤三郎の子が「この度の勲功に、親の命を助けて下されい」と訴える。ではなぜ親を訴えたのかと問うと、よその人から訴えられたなら親子はもちろん一門の罪は逃れられない。そこで自分が訴人して、褒美に親の命をもらい受けようと考えた。どうか親の命を助けて下されという。河野は親孝行な息子に心動かされ、藤三郎の命を助けることにする。さらに、子には褒美として河野家重代の太刀まで与え、親子は嬉しそうに帰っていく。

＊本文は北川忠彦・安田章校注〈日本古典文学全集〉『狂言集』（小学館）に拠る。なお、本作は〈新編日本古典文学全集〉『狂言集』（小学館）には収録されていない。

＊右のあらすじからわかるように、「鶏猫」には猫は登場しない。狂言には実際に猿（靭猿）、狐（釣狐）、狸（狸腹鼓）の登場する演目はあるが、猫の登場する話はない。筋としては「牛盗人」と同工。

■ちょっと寄り道 ―中世文学のなかの犬たち

①一人の女と五人の男、みんな犬に生まれ変わって…

信州のある山寺に飼われている犬が五匹の子を産んだ。だが母犬はそのうち一匹の仔犬だけを憎んで乳を呑ませず、歯をむき出して噛みつく。僧たちはそんな母犬を憎んだ。ある時僧たちは一斉に同じ夢を見る。母犬の前世は遊女で、五人の夫がいた。四人は情け深い人たちだったが、残る一人は女を人とも思わず、女を煩わせ、困らせるばかり。五匹の仔犬たちは五人の男たちの生まれ変わりで、女（母犬）としてはこのような因縁があって、かの男（子犬）を愛おしいと思うことができず、つらく当たっていたのだという。

（無住『沙石集』巻第九 第一〇話「前業の報ひたる事」）

＊無住（一二二七～一三一二）は鎌倉時代の僧侶。『沙石集』は弘安二年（一二七九）に起筆。一三世紀後半～一四世紀初頭に成立した仏教説話集。

②家の守りは犬におまかせ！

養ひ飼ふものには、馬・牛。繋ぎ苦しむるこそいたましけれど、なくてかなはぬものなれば、いかがはせん。犬は、守り防ぐつとめ、人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど、家ごとにあるものなれば、殊更に求め飼はずともありなん。

その外の鳥・獣（けだもの）、すべて用なきものなり。走る獣は檻にこめ、鎖をさされ、飛ぶ鳥は翅を切り、籠に入れられて雲を恋ひ、野山を思ふ愁、止む時なし。その思ひ、我が身にあたりて忍びがたくは、心あらん人、是を楽しまんや。生を苦しめて目を喜ばしむるは、桀・紂（ともに中国古代の暴君）が心なり。王子猷（書聖王羲之の子、書家で風流人）が鳥を愛せし、林に楽しぶを見て、逍遥の友としき。捕へ苦しめたるにあらず。

凡そ、「めづらしき禽（とり）、あやしき獣、国に養はず」とこそ、文（書経）にも侍るなれ。

（『徒然草』第一二一段）

③もし本当なら、相当残酷な話ですが…

雅房大納言（鎌倉中期の公卿、土御門源雅房）は才賢く、よき人にて、大将（近衛大将）にもなさばやとおぼしける比（ころ）、院（具体的に誰であるかは諸説あり）の近習なる人、「ただ今、あさましき事を見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、「雅房卿、鷹に飼はんとて、生きたる犬の足を斬り侍りつるを、中墻（なかがき）の穴より見侍りつ」と申されけるに、（院は）うとましく、憎くおぼしめして、日来（ひごろ）の御気色（みけしき）もたがひ、昇進もし給はざりけり。さばかりの人、鷹を持たれたりけるは思はずなれど（予想外のこと）、犬の足はあとなき事なり（根拠のないこと、根も葉もないこと）。虚言（そらごと）は不便（ふびん）なれども、かかる

事を聞かせ給ひて、憎ませ給ひける君の御心は、いと尊き事なり。

おほかた、生けるものを殺し、傷め、闘はしめて遊び楽しまん人は、畜生残害（互いに傷つけあう動物たち）の類なり。（中略）すべて、一切の有情（生き物）を見て、慈悲の心なからんは、人倫にあらず。

（『徒然草』第一二八段）

④犬は人の役に立つし、たいへん賢いのですが…

小鷹によき犬（ハヤブサなど小型の鳥で行う鷹狩用の犬）、大鷹に使ひぬれば、小鷹にわろくなるといふ。大につき小を捨つる理、誠にしかなり。人事多かる中に、道（仏道）を楽しぶより気味深きはなし。これ実の大事なり。一たび道を聞きて、これに志さん人、いづれのわざかすたれざらん。何事をか営まん。愚かなる人といふとも、賢き犬の心におとらんや。

（『徒然草』第一七四段）

⑤犬も人に危害を加える場合があります

人突く牛をば角を切り、人食ふ（かみつく）馬をば耳を切りて、そのしるしとす。しるしをつけずして人をやぶらせぬるは、主の咎なり。人食ふ犬をば養ひ飼ふべからず。これ皆咎あり。律の禁なり。

（『徒然草』第一八三段）

⑥ついでに、狐の場合は？

狐は人に食ひつくものなり。堀川殿（兼好が諸太夫として仕えた源具守家）にて、舎人が寝たる足を狐に食はる。仁和寺にて、夜、本寺の前を通る下法師に、狐三つ飛びかかりて食ひつきければ、刀を抜きてこれをふせぐ間、狐二疋を突く。一つは突き殺しぬ。二つは逃げぬ。法師はあまた所食はれながら、ことゆゑなかりけり。

（『徒然草』第二一八段）

⑦修行の足りない狐？

五条内裏には、妖物ありけり。藤大納言殿語られ侍りしは、殿上人ども黒戸にて碁をうちけるに、御簾をかかげて見るものあり。「誰そ」と見向きたれば、狐、人のやうについ居て、さし覗きたるを、「あれ狐よ」ととよまれて、惑い逃げにけり。未練の（鍛錬の足りない未熟な）狐、化け損じけるにこそ。

（『徒然草』第二三〇段）

＊『日本霊異記』や『今昔物語集』など仏教の威徳を説き広めるために編まれた説話集は、鬼神の存在や人の転生譚、あるいは道成寺説話の如き変身譚、はたまた聖の奇跡や霊

験譚等々、現実離れした奇談の類を多数収録しているが、『徒然草』は世の無常を説き、仏道を学ぶこと（学問）を勧めながら、不思議とそうした「不思議な話」は載せていない。猫またといい、狐といい、一般に「妖」「怪」「変化」のイメージで語られることの多い動物たちだが、兼好はそうした、現実にはありえない空想や奇談・伝説の類は一顧だにせず、むしろ事実に立脚してこれらを記述・記録する現実主義的な姿勢を貫いている。おそらく兼好にとって、現実世界のほうが、あるいは現実に生きている人間たちの方が、奇妙で不思議で興味深く、絶好の観察・考察の対象だったのではなかろうか。

【参考】
各地の猫また伝承&ネコが妖怪視される理由について

○鈴木棠三『日本俗信辞典　動・植物編』（角川書店、一九八二・一一）によれば、「古ネコは化けるといわれるが、それは、人を化かす（津軽）、ということでもある。ネコを長い間飼うとネコマタ（妖怪）になる（香川）、というが、どの程度が古ネコであるかは、所により考え方が違う。ネコは三年飼うと化ける（三重県阿山郡）、三年飼ったら捨てろ（岩手県和賀郡）。赤ネコは三年たてば踊り出す、或いは主人をねらう（愛媛）。一貫目以上のネコは化ける（高知）、オット（牡）ネコは七斤の重さになると化ける（壱岐）、三貫目以上になると山ネコになる（宮崎）、などいう。」

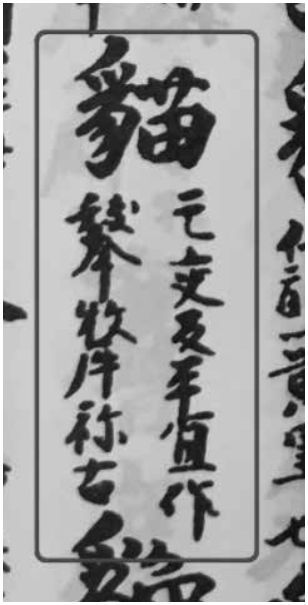
○笹間良彦『図説・日本未確認生物事典』（柏書房、一九九四・一）は、猫が妖怪視される要因として、「じっと物を見詰める習癖」「近寄るのに音を立てないこと」「身体がしなやかで身長の倍、時には五倍程の高さに飛びあがったり飛び降りたりすること」「鋭い爪を隠していて必要の時には武器として使用すること」「無邪気で愛らしいと思われる反面、獰猛で敏捷であること」「人によく馴れるが自我が強く、人の強制に中々応じないこと」「人に飼われているという意識がなく、人と対等と思っていること」「瞳が丸くなったり細くなったりして夜目が光ること」などをあげている。

○常光徹『学校の怪談――口承文芸の展開と諸相』（ミネルヴァ書房、一九九三・二）所収「『猫と南瓜』の構造」は、猫について「野生の部分を濃厚に残しているこの動物は、いともかんたんに日常世界を抜け出て、闇の領域を徘徊する」と述べ、人間に従順な家畜などとは異なる「両義性を帯びた不可解な性格」を指摘している。

吾輩も猫である
――日本文学史の中のネコたち
【古辞書編】

字書
昌住『新撰字鏡』
平安時代前期（九世紀末～一〇世紀）成立

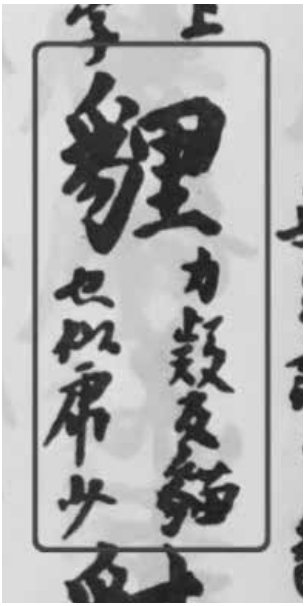
○貓　［亡交反平宜作／■葬祢古］



（天治本『新撰字鏡』第八巻「犭」部第七七）

【大意】
貓（猫）…音は反切法で「亡交（ミヤオ）」。日本でいうネコのこと。

○貍　［力疑反猫／也似虎少］



（天治本『新撰字鏡』第八巻「犭」部第七七）

【大意】
貍（狸）…音は反切法で「リ」。猫のこと。虎に似ているが小さい。

＊［　］内は割注。■は判読困難箇所。以下同じ。
＊反切法とは漢字二字で発音をあらわす方法。たとえば、「貓」は「亡」［miuang］の子音と「交」［jiao］の母音の組み合わせなので「ミヤオ」となる。
＊画像（影印資料）は京都大学文学部国語学国文学研究室編『天治本 新撰字鏡（増訂版）』（臨川書店、一九六七・一二）に拠る。

本草書（薬物辞典）
深根輔仁『本草和名』　平安時代前期（一〇世紀初頭、九一八年）成立

○家狸　一名猫　和名祢古末

（『本草和名』下巻「獣禽六十九種」）

【大意】

家狸…猫ともいう。和名はネコマという。

＊右のように、『本草和名』が「家狸」の別名を「猫、ねこま」と記していること。また、後述の『類聚名義抄』が「狸」を「野猫」と説明していることから、平安時代は「猫／貓」は家猫・飼い猫の類をいい、「貍／狸」は野良猫（野生の猫・野生化した猫）のことをいいあらわしていた可能性がある。

＊画像（影印資料）は寛政八年刊『本草和名』（国立国会図書館デジタルコレクション）に拠る。

辞書
源順『和名類聚抄』　平安時代中期（一〇世紀中ごろ）成立

○猫　野王案、猫［音苗和名／祢古万］似虎而小、能捕鼠、為粮

（『和名類聚抄』巻一八「毛群部」第二九「毛群名」）

【大意】

猫…音は反切法で「苗（ミヤオ）」。和名はネコマ。虎に似て小さく、鼠を捕るのが得意で、これをエサとしている。

＊「野王」は梁の顧野王（こやわう）のこと。中国南北朝時代（五四三年）に『玉篇（ぎく）』（部首別の漢字字典）を編纂した。野王自身が自分の考えを記す時「野王案」と書く。『和名類聚抄』は『玉篇』の記述を引用している。

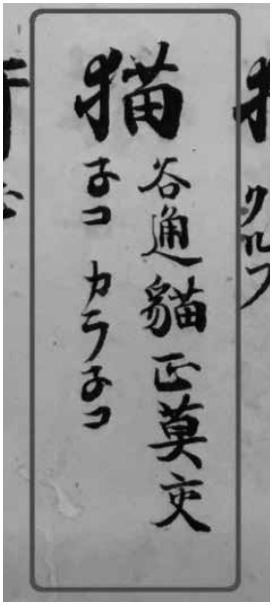
＊画像（影印資料）は元和三年古活字版『倭名類聚抄』二十巻本（国立国会図書館デジタルコレクション）に拠る。ちなみに、馬渕和夫編『古写本和名類聚抄集成』第一部「諸本解題・関係資料集及び語彙総集」（勉誠出版、

二〇〇八・八）所収、十巻本『和名類聚抄』巻七には見出し語に「猫（子コマ）」とあって、野王案猫［音苗祢古麻］似虎而小能捕鼠為粮」とある。

字書

『類聚名義抄』　平安時代末期（一一世紀末）成立

○猫　［俗通貓正莫交／子（ね）コ　カラ子（ね）コ］

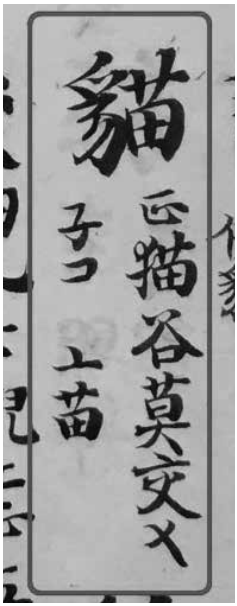


（観智院本『類聚名義抄』「仏・下・本」第三〇「犬」の部）

【大意】

猫…「猫」は俗字で、正しくは「貓」と書く。音は反切法で「莫交（マウ）」。日本でいうネコのこと。唐猫（からねこ）。

○貓　［正猫俗莫交反／子（ね）コ　音苗］

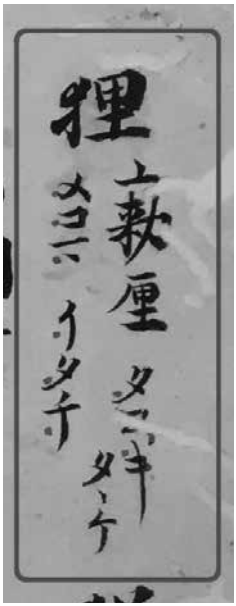


（観智院本『類聚名義抄』「仏・下・末」第三三「多（ち）」の部）

【大意】

貓（猫）…正しくは「貓」と書く。俗に「猫」とも。音は「莫交（マウ）」。ネコのこと。音は苗（ミヤオ）。

○狸　［釐厘　タヌキ／タヽケ／メコマ／イタチ］



（観智院本『類聚名義抄』「仏・下・本」第三〇「犬」の部）

【大意】

狸…音は反切法で「釐厘（リ）」。タヌキのこと。タタケともいう。あるいはメコマ、イタチのこと。

○狸　［狸　正タヌキ／タ、ケ］

（観智院本『類聚名義抄』「仏・下・末」第三三「多（チ）」の部）

【大意】

貍（狸）…正しくは「狸」と書く。タヌキのこと。タタケともいう。音は反切法で「釐（リ）」。野猫のこと。

＊『類聚名義抄』原撰本の大半は散逸。現存完本は鎌倉時代末期の書写。原撰本を増補した観智院本（国宝・天理図書館蔵）『類聚名義抄』は「仏・法・僧」三部に分かれ、かつ「仏」の部は「上・中・下」の三部、さらに「仏・下」の部は「本・末」の二部に分かれている。その「仏・下・本」犬部、および「仏・下・末」第三三「多（チ）」部の二箇所に「猫」「狸」が立項されている。

＊画像（影印資料）は天理大学附属天理図書館編〈新天理図書館善本叢書〉『類聚名義抄　観智院本』（天理図書館出版部・八木書店、二〇一八・四）に拠る。

辞書

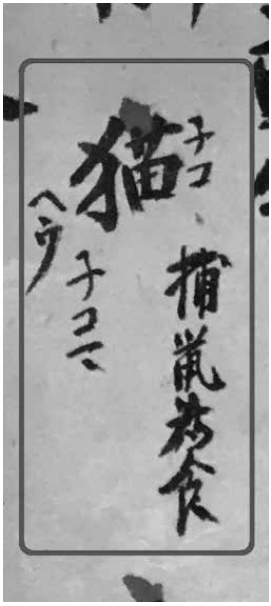
橘忠兼『色葉字類抄』二巻本

平安時代末期（一二世紀中ごろ）成立

ネコ

○猫　［捕鼠為食］

ヘウ／ネコマ



（『色葉字類抄』二巻本、巻上の下、祢（ね）の部・動物）

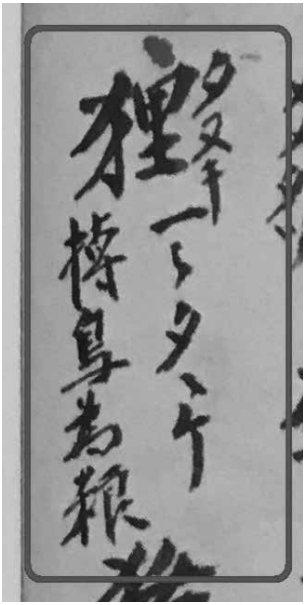
【大意】

猫…和名はネコ、音はヘウ。鼠を捕えてエサとする。ネコマ

ともいう。

タヌキ

○狸　［一云タヽケ／搏鳥為粮］



（『色葉字類抄』二巻本、巻上の下、他の部・動物）

【大意】

狸…和名はタヌキ。あるいはタタケとも。鳥を搏ってエサとする。

＊画像（影印資料）は財団法人前田育徳会尊経閣文庫編〈尊経閣善本影印集成〉『色葉字類抄　二　二巻本』（八木書店、二〇〇〇・一）に拠る。

辞書

橘忠兼『伊呂波字類抄』十巻本

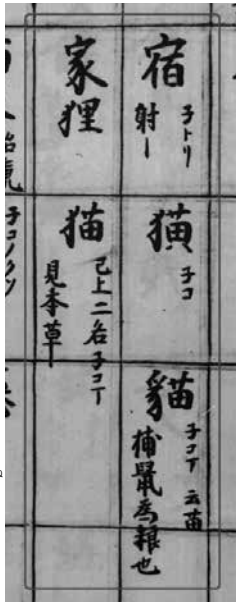
鎌倉時代初期（一三世紀前半）成立

○猫（猫）［ネコ］

○貓　［ネコマ　云苗／捕鼠為粮也］

○家狸

○猫　［己上ニ各ネコマ／見本草］



（『伊呂波字類抄』十巻本、巻五、祢の部・動物）

【大意】

貓（猫）…和名はネコマ。音は「苗」。鼠を捕えてエサとする。

家狸・猫…いずれも「ネコマ」と読む。『本草和名』参照のこと。

○猩（狸）［タヌキ／タヽケ／搏鳥馬（為か）粮也］
○猫狸

（『伊呂波字類抄』十巻本、巻四、太（た）の部・動物）

【大意】

狸…和名はタヌキ、あるいはタタケ。鳥を搏（う）ってエサとする。

＊『色葉（伊呂波）字類抄』は二巻本と十巻本の他に、三巻本（一二世紀後半成立）があるが、三巻本は巻中と巻下の一部、肝心の「た」から「ふ」までが欠けており、「猫」も「狸」もわからない。

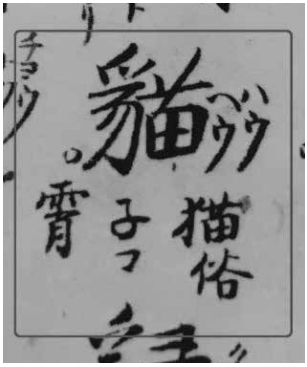
＊画像（影印資料）は築島裕責任編集・月本雅幸編集協力〈大東急記念文庫善本叢刊〉中古中世篇・別巻二『伊呂波字類抄』第二巻（汲古書院、二〇一二・一〇）に拠る。

字書

菅原為長『字鏡集』

鎌倉時代初期（一三世紀中ごろ）成立

ハウ／ヘウ
○貓［猫俗／ネコ／霄］



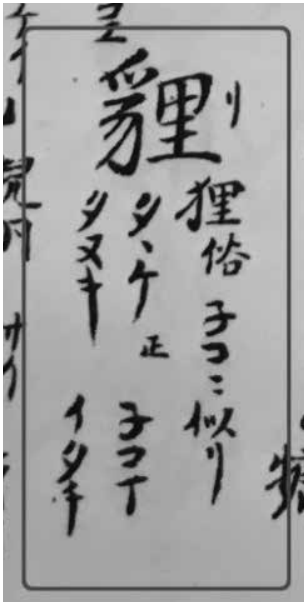
（第八巻「動物部」上「豸」部）

【大意】

貓…音はハウ、またはヘウ。「猫」は俗字。日本でいうネコのこと。霄。

リ

○狸　［狸俗ネコニ似リ／タ、ケ正ネコマ／タヌキイタチ］



（第八巻「動物部」上「豸」部）

【大意】

狸（狸）…音はリ。「狸」は俗字。ネコに似た動物である。正しくはタタケという。他にネコマ、タヌキ、イタチともいう。

＊画像（影印資料）は中田祝夫・林義雄『字鏡集白河本寛元本研究並びに総合索引』第一冊「字鏡集　白河本　影印篇」（勉誠社、一九七七・七）に拠る。

類書（百科事典）

行誉『塵嚢鈔』

室町時代（文安二～三年〈一四四五～四六〉）成立

編者不詳『塵添塵嚢鈔』

（天文元年〈一五三二〉）成立

（前略）狸ノ字ヲ。タ、ゲトヨム。又子コマ共ヨム。只子コト同事也。狸ヲ。猫ニ用ハ僻事也。（中略）狸猫キハ格別也。狸ハ。猫ナルベシ。（中略）猫ト狸ケ同類ト云事ソ。

（『塵嚢鈔』巻五の五十二、『塵添塵嚢鈔』巻八の十「狸事」）

＊『塵添塵嚢鈔』は、勧勝寺の僧行誉が室町時代（一五世紀中ごろ）に編纂した『塵嚢鈔』に、鎌倉時代（一三世紀）の『塵袋』の項目（二百項目余）を増補したもの。

＊本文は『塵添塵嚢鈔・塵嚢鈔』（臨川書店、一九六八・三）に拠る。なお、片仮名の振り仮名は原文通り。平仮名の振り仮名は通読の便を考慮して私にあてたものである。

辞書

谷川士清編『倭訓栞』

江戸時代中期（一八世紀）成立

○**ねこ**　猫をいふ。寝子の義。睡を好獣也。よて睡猫児などい

へり。倭名抄にハねこまといへり。霊異記に狸もよめり。○琉球にハ異色の猫あり。穏岐ノ国の竹島の猫ハ此間の猫とハ異れりといへり。三毛を花猫といふ。宝永乙酉（宝永二年／一七〇五）五月に江戸大久保某の家の猫、二頭六足二尾灰毛の子を産す。韓猫ハ源氏にみゆ。蒙頌（猿の一種）也。夫木集に、敷しまや大和にハあらぬ唐ねこを君が為にと求め出たり。時ねこハ金華猫也。麝香猫ハ霊猫也といへり。○諺に猫根性といふハ人の心の貪欲を匿し外に露ハさぬ者をいふ。○土佐国にしらが山あり。大山也。多く猫住て猟人も至り得ずといへり。是ハまたなるべし。○鼠とる猫ハ爪を蔵といふ諺ハ説苑に君子ハ愛レ口虎豹ハ愛レ爪と見えたり。○猫にかうふり給りて命婦など、いふ事枕草紙に見えたり。○猫の二歳にて死たりし児に化て母の乳を毎夜吸たりし事奥州白川に有。又妾に化し事江戸にあり。○歌に手かひの虎ともよめり。本草に今南人猶二呼レ虎為一レ猫と見えたり。○猫に堅魚節あづけるといふ諺ハ、後漢書に使二餓狼守レ庖厨飢虎牧一レ牢豚といふに同じ。○猫に小判見せるといふ諺ハ、野客叢書に対レ牛弾レ琴といふ類也。○但馬美父郡の一村に猫をもて使とする社あり。農家蠶（蚕）を養ふ節にハ、必其使を乞て鼠をかる。其使の猫ハ、社前の一拳石を持帰也。謝するに及び又一拳石を添ふ。よて小石丘壑の如しといふ。○尾の短き猫を東鑑に五分尻と見ゆ。今東国に午房尻といふハ其訛也。土佐国にハかぶ猫といふ。○猫の眼ハ十二時にかハり、鼻ハ夏至の一日あた、か也といへり。又腕をもて面を洗ふ時、腕耳を過れバ、不意に客来と西陽雑俎に見ゆ。眼の歌睛をもて知べし。六ッ丸く四八瓜ざね五と七と玉子なりにて九ッは針。○猫島ハ加賀ノ国の沖にあり。今昔物語に見ゆ。○猫間ノ斎院ハ高倉院皇女範子内親王也。

（『倭訓栞 前編』二十二「祢の部」）

＊『説苑』は中国前漢の故事・説話集。『野客叢書』は南宋の王楙（王勉夫）撰。中国の故事成語集。『酉陽雑俎』は中国唐代、段成式の手になる随筆。異事奇談集。八六〇年ごろ成立。

＊なお、同書は「ねこ」の前に「ねう」を立項、「源氏に猫の声をねう〳〵といとらうたけになけハと見えたり。今にやを〳〵といふがごとし」と記す。

○ねこまた　徒然草に、奥山にありて人を食ふといへるものハ、揉挺をまたと訓ぜし物なるべし。山ならねども、こゝらに猫のへあがりて猫またになるといふは、今俗いふ所のもの也。四国辺の賤民にハ、ねこまたをつかふ夫神の類あり。○金色に光りて毛ハ一條もなくて、髭ハ長く、尾ハ両岐にわかれ、爪の鋭き事、剣を欺き、牙ハ狼に似、頭より尾まで九尺に及べり。死して両眼を閉ず、光る事星のごとし。奥州猪狩氏の児驚かされし者也。津軽の者いふ。山猫の数百歳を経て狒々に類せる物也。松前には折々殺して捨る。人を喰者也とぞ。○応仁紀に公方儀も又猫打て是非の沙汰こそなかりけりと見えたるも是にや。よくばけるをもてあたらぬ事にいへる諺なるべし。西土の書にも猫鬼野

道など見えたり。

（『倭訓栞 後編』巻之十四「那尓奴祢能之部」）

＊後藤秋正「「猫と漢詩」札記――古代から唐代まで」（『北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）』五七―二、二〇〇七・二）によれば、隋の初代皇帝文帝（楊堅）の開皇一八年（五九八）五月の詔に「蓄猫鬼・蠱毒・厭魅・野道之家、投於四裔（猫鬼・蠱毒・厭魅・野道を蓄うるの家は四裔に投ず）」とある。これは猫鬼等妖怪に仕え、呪術などを使うような輩は「四裔（国土の四方の果て）」に捨てる（国外追放に処す）ということだが、いわゆる「ねこまた」も唐土の「猫鬼野道」と同じ、ということだろう。

＊引用本文は谷川士清編、井上頼圀・小杉榲邨増補『増補語林 倭訓栞』全四巻（名著刊行会、一九七三・五）に拠る。谷川士清（一七〇九～一七七六）の『和訓栞』は前編・中編・後編の三部からなる。同書は全九三巻に及ぶ大部の辞書だが、刊行が始まったのは著者の没後、安永六年（一七七七）である。全編の完結は明治二〇年（一八八七）で、刊行開始から完結まで百年以上も要したことになる。同書はその後、明治三一年（一八九八）、井上頼圀・小杉榲邨によって増補・刊行されたが、その際『和訓栞』の「後編」は『増補語林 倭訓栞』に収録されておらず、名著刊行会本でも活字による翻刻本文ではなく影印が収録されている。なお、通読の便を考慮して、私に句読点や読み仮名、濁点等を補った。また、活字本の漢文については製版本（影印資料）にあたり、一部返り点を改めたところがある。

（この稿つづく）